

FT Festival/Tokyo

フェスティバル / トーキョー 16
人材育成プログラム

Report

F/T キャンパス 2016 参加者レポート集

F/T Campus 2016

はじめに

フェスティバル/トーキョーでは、舞台芸術作品の上演以外にも、業界内で従事したいと考える人に向けたインターン・プログラム、市民活動によってフェスティバルを支えるサポーター事業、ワークショップ、レクチャーなどのプログラムを行い、舞台芸術のすそ野をひろげ、未来の舞台芸術シーンを支える人材の育成に取り組んでいます。

この冊子では、そんな人材育成事業のうちのひとつ「F/T キャンパス 2016」の参加者から寄せられたレポートをまとめました。キャンパス終了後、一ヶ月以内に提出された事後レポート、「3年後/10年後のビジョン」をそのまま掲載する形で構成されています。F/T キャンパスの熱気あふれる雰囲気と、社会と向き合いながら葛藤する参加者の未来への萌芽を垣間見ていただければ幸いです。そして本冊子が、手に取ってくださった皆様にとって、人材育成事業の未来を考える契機となることを願っています。

フェスティバル/トーキョー実行委員会

目次

I. 事後レポート

わたしの3年後／10年後のビジョン

- 02 朝日 まどか（立教大学 現代心理学部 映像身体学科）
- 03 雨宮 彩乃（明治学院大学 文学部 芸術学科）
- 04 石田 優希子（国際基督教大学 教養学部 リベラル・アーツ学科）
- 05 鶴飼 瑞希（一橋大学 商学部 経営学科）
- 07 王 皎令（青山学院大学大学院 総合文化政策研究科 修士課程）
- 08 大橋 典生（大阪経済大学 人間科学部 人間科学科）
- 09 方瀬 りっか（東京学芸大学 教育学部 教育支援課程）
- 10 釜木 美緒（明治学院大学 文学部 芸術学科）
- 11 川縁 芽偉子（立教大学 現代心理学部 映像身体学科）
- 12 神戸 みなみ（明治学院大学 文学部 芸術学科）
- 13 木村 和博（一橋大学大学院 言語社会研究科 修士課程）
- 14 今野 誠二郎（学習院大学 経済学部 経営学科）
- 15 櫻井 美穂（日本大学 芸術学部 演劇学科）
- 16 佐藤 綾香（静岡文化芸術大学 文化政策学部 芸術文化学科）
- 17 佐藤 和佳奈（静岡文化芸術大学 文化政策学部 芸術文化学科）
- 18 鈴木 えりか（青山学院大学 総合文化政策学部 総合文化政策学科）
- 19 田中 ののか（大正大学 文学部 人文学科）
- 20 千葉 ゆり（日本大学 芸術学部 演劇学科）
- 21 寺田 凜（東京学芸大学 教育学部 教育支援課程）
- 22 西島 彩貴（武蔵野美術大学 造形学部 建築学科）
- 23 仁科 太一（静岡大学 人文社会科学部 言語文化学科）
- 24 西 菜津子（東京大学大学院 人文社会系研究科 博士課程）
- 25 藤田 祥恵（共立女子大学 文芸学部 文芸学科）
- 27 松野 まりあ（日本大学 法学部 新聞学科）
- 29 三枝 舞子（日本大学 芸術学部 放送学科）
- 30 宮田 健一（慶應義塾大学 経済学部 経済学科）
- 31 三好 隆生（横浜国立大学 教育人間科学部 人間文化課程）
- 32 吉田 美音子（静岡文化芸術大学 文化政策学部 芸術文化学科）
- 33 米沢 のぞみ（横浜国立大学 教育人間科学部 人間文化課程）

※F/Tキャンパス2016参加者31名のうち、レポートの提出があった方のみ掲載しています。

F/T キャンパスを受けて

F/T キャンパス終了からしばらくしても、私の心に残っている言葉がある。それは、「リサーチとアウトプット」。4 日目最後の振り返りで萩原先生が 2 つのキーワードとして話されていた言葉だ。私にとって、F/T キャンパスで学んだことと、これから力を入れていきたいことの両方がこの言葉に集約される。

4 日間で特に印象に残っているプログラムが『Woodcutters — 伐採 —』の鑑賞である。伐採は、4 時間以上という上演時間や、かなり素養を必要とする内容ということもあり、私にとっては難しい作品だった。もしも一人で見ていたら「よくわからなかった」という感想で終わってしまったかもしれない。しかし、キャンパスの仲間と「わからない」を共有していくうちに、「わからなかった。でも、そのなかで私はこう思った……」という続きが生まれていった。アウトプットする中で自分の意見が形作られ、話しながら「あ、自分はこんなことを考えていたのか」と気づき、驚かされることが何度もあった。また、観劇前後のルパのトーク、他の人の感想を聞く中で、「知識があればもっと楽しめたのに」と、悔しい思いをすることも何度もあった。これは、普段一人で鑑賞している私にとって衝撃的だった。

その他にも、プログラムが魅力的だったというのはもちろんだが、以上に F/T キャンパスに参加してよかったと思えるのは、仲間との出会いに依るところが大きいかもしれない。参加当時、私は自分が勉強していることや将来のことに迷っていた。好きではあるものの、本当にこれが続けていいのかわからなくなっていた（それは、今でも完全に消えたわけではないが……）。しかし、プログラムが始まってしまえば、そんなことは忘れていた。芸術や文化政策に興味がある学生達、講師やスタッフとして実際にその分野で働く社会人が集まったといっても、その興味関心・専門としている分野は様々だ。3 泊 4 日の期間中に自分がどんな人物なのか知ってもらうこと、相手がどんな人物なのか知ることに、とにかく必死だった。他の人の話を聞く中で、なんとなく関わっていると思っていた演劇が、好きだから、自ら選択しているのだということに否応なしに自覚させられた。

私は演劇が、劇場が好きなんだ。

先に挙げた萩原先生の「リサーチとアウトプット」という言葉は、作品鑑賞のコツという文脈で語られたことだが、今の私には、もっと普遍性をもって響いている。調べて知ること、そして発信していくこと。そのために「自分のことばで話せるようになりたい」と切実に思った。

この 4 日間で出会ったすべての人に背中を押された気分だった。

わたしの 3 年後のビジョン

- ・自分のことばで話せる
- ・演劇を日常のことばで翻訳できる
- ・劇評を書いている

わたしの 10 年後のビジョン

- ・演劇に関わる職場で働いている
- ・生活の中に芸術がある

F/T キャンパスを終えて

キャンパスに行く前、正直憂鬱だった。自分は大学で演劇史を学んでいるが、演劇で人と繋がる機会がなかった。そのため、同世代の舞台芸術に強い関心を持つ学生、アーティストに出会える場所は自分に合わないような気がして怖かった。振り返るとそんなことは杞憂だった。キャンパスが終わった今も、会話が頭から離れない。もっと話をしたかったなあ、とも感じている。大学に戻ってみて、このキャンパスの経験から学びたいことが増えた。きっと、自分にとってのキャンパスは続いている。インターン生としても、参加者としてもこの前向きな学びの場に参加できたことは、これからの人生を考える上で重要になるような、心に刻みつけられるような、そんな経験だった。

ここでは、キャンパス中の出来事を、観劇・観劇以外の企画・ゼミの3つに分けてまとめていく。

◎観劇について

キャンパスでは、『Woodcutters — 伐採 —』、『シカク』(A,Bバージョン)を観劇した。海外演目もダンス演目も初めて観るものだったと同時に、正直自主的に選ぶ作品ではなかった。好みという枠から離れ作品と出会うことは貴重な経験になった。また、参加者全員が同演目を一斉に見るので、終演後には作品について語り合う時間が自然に起き、様々な視点の話を聞くことができた。また、普段ポーランドについて学んでいる参加者が開演前に簡単なレクチャーを行ってくれたこと、これは観劇体験を深める上で大きな助けになってくれた。

◎観劇以外の企画について

アーティストとのトーク企画や、『福島を上演する』の稽古モニタリングなど充実した内容であり、それぞれの企画で様々な話を聞くことができた。特に、最終日のファイルズとイセをゲストに迎えた企画では、2人がとても楽しそうに私たちの企画に興味を持ってくださったことから、海外アーティストを身近に感じることができ、とても印象に残っている。また、「自分自身を信じること。」「企画の中で自分が楽しむんだという気持ちを持つこと。』というメッセージは、とても響くものであった。強く印象に残っている言葉である。すべてのアーティストトークに共通して、参加者が必死に考えや気持ちと言語化し、アーティスト伝えようとしている様子は適切な表現であるかわからないが、とてもよかった。そして、その言葉に耳を傾けてくださり、真摯に応じてくださるアーティストの方もみなさん素敵だなあと感じた。

◎ゼミについて

今回は、柴さんのゼミに参加した。キャンパス期間中の「かんさつ」を通じて、小さな演劇作品を創るものだ。演劇に参加するのが初めてだったが、難しいことはなく楽しんで全日程参加することができた。気になったことの傾向が似ていた参加者と一緒に小演劇を創ったが、最初は彼女が感じたこと・考えていることを理解できず、表現することができなかった。しかし、何度か練習していくうちに、彼女の感覚の欠片を共有することができたのである。今まで他者の感覚をこんなに必死に理解しようとしたことはなく、理解したい！と強く思うこともなかった。しかし、演劇を観るときは、こうやって誰か、何かの感覚を必死に拾おうとしていると気がついた。小グループの作品も理解できるようになると面白い。演出がつく、参加できるようになる、大きな劇になる、その行程が面白かった。わくわくするようなことの連続であった。また、柴さんの演劇に対する考え方を聞くことができたのも貴重な経験であった。

わたしの3年後のビジョン

◎いっぱい笑う

何があっても3年後も今みたいにたくさん笑えていたらいいな、と思っている。まだ自分には何ができるかわからないけれど、きっと「自分が笑顔で居られるようなことをする」という前向きさなら持っていられると思う。

◎学ぶことを諦めない

学び続けたいと最近強く感じるので、直近の目標に置いておく。もう学生じゃないから…なんて自分自身に蓋をしているような自分を想像した時に、悲しくなった。諦めずに興味を持てることを学び続けたい。

わたしの10年後のビジョン

◎一緒に笑ってくれる人いっぱい笑う

3年後、自分が笑顔でいられることをとっていたらきっと10年後には一緒に笑ってくれる人と何かをしているはずだ。なので、そういう人の輪を作り、いっぱい笑える日々をつくってきたい。

◎納得して生きる

31歳。「納得して今これをやっています」って言えたらカッコいい。何をやってもいいから、とにかく自分自身のやっていることに納得してほしい。そのために10年真面目に生きようと思う。

F/T キャンパスを受けて

ひとりで芝居を観に行くのが好きだ。始まる前や終わった後気ままに過ごせるし、チケットを誰かとスケジュール調整をして購入する手間もない。それに、劇についての感想を言い合うことが苦手だった。いつかあまり芝居に興味がない人と野田秀樹の公演を観に行ったとき、あまりにその感想が浅いので嫌になってしまった。また、「演劇をやっているこの子を連れていけば、解説がもらえるのではないか」という理由でミュージカルに誘われたこともあった。私にとって演劇はひとりで楽しむものだった。

それが、キャンパスのあとがらりと変わった。キャンパスでは観劇の後、自分の考察、感想を寝る間を惜しんで語り合った。なんと刺激的で、深いディスカッションなのだろうと思った。なかには演劇を普段そんなに観ない人もいたが、その場にいた全員が演劇に対して真剣に向かい合っているのを言葉から感じた。自分の考えを受け入れてくれるし、それに関してさらに視野を広げるようなレスポンスもくれる。誰かと演劇を観ることは楽しいのだと気づかされた。

スタッフの方々が言っていたことだが、「演劇に興味がある大学生の交流」がキャンパスの目的のひとつでもある。実際、私には多くの出会いがあった。日本で演劇の研究をしているひと、今回のキャンパスなど様々なイベントを作り上げているひと、劇団の主宰をする大学生、ポーランドの演出家……。そういった演劇が好きの人々と話すことで、「私はひとりじゃない」と思った。私は大学で演劇サークルに所属して、休みなく何かしらの演出やスタッフ、時にはキャストをやっている。皆本気で取り組んではいらぬもの、将来の進路に演劇を考えている人はあまりいない。また、私の通う大学では演劇を専攻することができない。演劇に関する授業もあるにはあるが、せいぜい5つくらいだ。だから、演劇について専門的な勉強をしている人間に会うことは私にとって本当に新鮮だった。こうして演劇の話は何時間しても飽きない、私と似た人たちが近くにこんなにいるのだ。私はひとりじゃない。

ひとりじゃないことに加えて、私は自分の中にある、ある種の焦りにも気づいた。観劇する芝居の数、持っている知識の量、どれをとっても私は劣っていると感じた。とても悔しかった。それは私にとって、自分が観る演劇を浅くしか味わうことができないということであるからだ。もっと知りたい。もっと観たい。もっと変わりたい。めらめらとそういう意欲が燃え立った。

演劇と自分について見つめるためには、これほど良い機会はない。参加して本当に良かったし、誰かに勧めたいと心から思う。特に、かつての私のように、演劇と向かい合うとき孤独を感じているひとには。

わたしの3年後のビジョン

留学に行ったぶん卒業が伸び、大学5年生をしている。

わたしの10年後のビジョン

高校の教員になって、授業に演劇を取り入れている。

F/T キャンパスを受けて

★F/T キャンパスでの気づき

そこにいた人たち（学生以外の方々も含め）が、人生について社会について文化について演劇についてあらゆることに対して、深く考え自分の意見を持っていることに驚きました。さらには、その考えに基づいて既に動いている人もいて、自分が如何に出遅れているかを思い知りました。また、相手に対し真剣対峙する姿勢を持っている人が多く、私もそうありたいと思いました。

★F/T キャンパスで学んだこと

F/T キャンパスで学んだことはたくさんあり、ここにはとても書き切れないので、キャンパス後によく考えていたことから1つ抜粋して書こうと思います。それは、文化政策ゼミの稲村先生から教わった、「観客の反応」の4分類についてです。これは、演劇に対する反応で観客を分類すると、①無関心、無関心な人②形容（つまらない、楽しい、美しい）できる人③解釈し、自分の言葉で語れる人（批評家など）④作品を言葉以外で「再現」できる人に分けることができるといふものです。①→④と観劇回数が多くなっていき、人数では④→①で多くなっていきます。ざっくりいうと、ミュージカルファンには②が多く、小劇場ファンには③が多いのだそうです。私がこの理論について考えていた理由は、私の関心ごとである商業と演劇の関係、エンターテインメントと芸術の関係について考える時のヒントになりそうだなと思ったからです。まだ整理し切れていないので、全てをここにうまく記述することができないのですが、これまでに考えたことをミュージカルと小劇場演劇を対比させて簡単に書きたいと思います。わかりにくい説明ですがご容赦ください…。

ミュージカルと小劇場演劇を2つの井戸に例えたいと思います。「小劇場演劇」という井戸には下から5分の2ぐらいのところまで栄養豊富な水が溜まっています。「ミュージカル」という井戸には、同じ量の栄養豊富な水の上に、栄養は少ないけれど甘い水が5分の4ぐらいまで溜まっています。そこに、水を汲みたい人々がそれぞれに長さの違うロープがついた桶を持ってやってきます。ロープの長い桶を持っている人（③）はどちらの井戸からも水をくむことができます。一方、ロープの短い桶を持っている人（②）は「小劇場演劇」から水をくむことができません。だから、相対的に「ミュージカル」から水をくむ人が多くなるのです。つまり言いたいことは、ミュージカルファンには②と③両方いて、もともと世の中には②の人が多いためにミュージカルファンは②が多いという理論が生まれるということです。一方で、②も③もミュージカルの観客として大切な存在あることは間違いありません。ミュージカルを作る側は、甘い水を生成すると同時に、栄養のある水を深層に忍ばせて置くことも忘れてはいけないということだと思います。

★最後に

F/T キャンパスに参加した一番の収穫は、たくさんの魅力的な方々に出会えたことです。このつながりを、いつまでも大切にしたいと思っています。このような貴重な場を作ってください、本当にありがとうございました。今後このF/T キャンパスが長く続いていき、同窓会のような形で縦のつながりも生まれていったらなお素敵だなと思います。

わたしの3年後／10年後のビジョン

★「才能や環境など、何も制約がないとしたらやりたいこと」を考えてみました。

（やりたいと言うだけなら誰にでも言えるので、方法を記せないことがふがいないです…）

10年後

「ミュージカルを作る人になる」（方法は作・演に限らない）

30年後

「日本にミュージカル観劇文化を浸透させる」＝「ミュージカルを開かれたものにする」

★作りたいミュージカル（理想）

・どの人も満足させることができるミュージカル

どの人とは？

初めて舞台に触れる人

初めてミュージカルを見る人

年に1回だけ舞台を見る人。

演劇ファン

リピートするミュージカルファン など

・オリジナルの作品

・長く再演される。

・人の心を震わせる（驚かせる）ような

★なぜミュージカルなのか？ミュージカルでなければいけないのか？

まとめてしまえば、本能的にミュージカルが好きってだけです（笑）でもそれでは元も子もないので、「なぜミュージカルが好きなのか」、「客席の向かい側にいる人たち（広い意味でミュージカルを作っている人たち）に嫉妬し、自分もそちら側に行きたいと思うのか」を無理矢理にでも帰納的に示してみようと思います。

この世に生きた証を残したい（笑）

→証は幅広い人々にプラスの作用をもたらすものであったらいいな

→私が作りたい、プラスの作用をもたらすものって？

→人の心を震わし、人の心に残るもの

→人の心を震わし、人の心に残るものって？

映画、スポーツ、ドラマ、本、ミュージカル以外の演劇、ドキュメンタリー、

人の生き様自体、音楽、などミュージカル以外にもいっぱいあるよね？

→その中でミュージカルだからこそその価値・魅力って？

- ・ 商業と芸術のバランス（→商業は発信力につながる）
- ・ 一過性でない（形を変えて再演される→古びない、感動力が減少しない）
- ・ 生の感動を人々（発信側、受信側）が同じ空間で共有できる。

F/T キャンパスを受けて

人はよく「初心を忘れず」を言うのですが、私は毎日自分に言うのは「好き」という気持ちを忘れないことです。「好き」を続けることは才能だと思います。昔から、音楽が好き、ダンスが好き、映画が好き、写真が好き、などなど。いまになって、演劇が好きで好きで仕方がない、毎日演劇のことしか考えていません。しかし、「好き」という炎を燃え続けるため、燃料が常に必要である。F/T キャンパスを受けることも燃料をもらうためです。

正直、恥ずかしいことですが、日本に来て、合宿は初めてです。来年は大学院卒業ということで、今回は最初で最後の学生時代の合宿でした。しかも行く前に心配していたのはみんなと仲良くできること以前、日本語をちゃんとできるのかの問題です。集団行動が苦手な私にとって、相当勇気あるのではないかと思います。でも本当に、本当に参加できてよかったです。むしろ来年もう参加できないことを寂しく思います。

ひとり観劇するのは当たり前なことでした。感想をかくのも SNS での投稿ぐらいでした。キャンパスでみんな一緒に劇場に行って、夜中まで感想をシェアしたりするのを経験すると、人と語り合うことの楽しさ、大切さを再認識できました。シャワー浴びながら小劇場の話をするのも夢みたいでした。仲間の大切さを改めて感じました。しかも、参加しに来た皆様びっくりするぐらい意識高いし、しっかりしています。途中みんなの発言についていけないという感じもしました。自分の勉強不足をつくづく思います。

そして、今回素晴らしい言葉を沢山いただいております。「妥協しない」とか、「自分に対して正直であること」とか、その中先生からいただいたこの金句が一番印象的です。「知識がなければ面白くない劇は単につまらない劇だ。だが知識があればあるほど劇の面白さを感じられる」もちろん知識が重要であることは存じております、単純に劇を楽しめることこそ「好き」を保つ燃料ではないでしょうか。

最後に「枠」について個人的な感想を言わせていただきます。覗き箱みたいな感じが好きな演出家と、舞台と観客の一体感を重視している演出家がいる、いままでずっと「どっちか」の感じでした。私自身も、日本に来て、外国人として観察することがいいのか、ここでの生活を慣れて考え方でネイティブになるほうがいいのかを悩んでいました。しかしルバさんの演出を見ると、境界線を利用して都合よく枠を移動すればいいのだ！とすっかり解決しました！これから、私も自分なりに枠を動かしてみます。

貴重な経験に感謝です。

最終日、この仲間達とはこの先きっとまたどこか出会うことができると信じて、サヨナラを言えました。

わたしの3年後／10年後のビジョン

3年後演劇国際貿易を流行らせる私

【走ることにについて語るときに僕の語ること】という村上春樹の本がありまして、村上春樹は「走る小説家」であるなら、私は「走る演劇人」を目指したいと思います。朝早起きして、早朝の綺麗な空気を吸いながら、走ります。本番前のウォーミングみたいに、走りながら、今日1日のスケジュールを脳内で確認しています。

脚本の進行を考えます。今年やっと友達から「舞台やりたい、脚本書いてよ」と頼みが来て、今書かなきゃいつ書くのというきっかけができて、これから年一本ぐらいのペースで書きたいと思います。最近見た映画の中好きなセリフがあって「頭の中にあるうちは、いつだって、何だって、傑作なんだよな。」中国語であろうが日本語であろうが、とにかく形にしたいです。

走ります。昔の私は国際貿易をやりました。演劇について、とにかく、海外公演だけではなく、人材やノウハウの輸入輸出がしたいです。例えば中国に上演することに適する脚本が見つかったら、日本から脚本と演出家（ある時スタッフまで）をパックして中国に持ってきます。また中国国内舞台役者の養成所の話を始めます。そして、アジアだけではなく、世界範囲内、舞台技術交流というより、正式なビジネスとして、演劇の自由貿易がはやり始めます。

プライベートには、そろそろ結婚相手がほしいと思い始めたでしょう。

10年後上海と東京に小劇場を持つ私

正直、10年後のことを考えると、まず「結婚できてますか」と心配になっちゃいます。笑。それを置いて、とにかく、大きくなりたいです。

最近よくよく考えると、自分がやりたいこと一番実現しやすい場合は自分の会社を持つことです。劇場の経営者というより、プロデュース会社を持つほうが可能性が広がるでしょう。

演劇の自由貿易も成熟な段階に入りました。自分が書いた脚本を、同時に上海と東京で上演されることもできるようになります。同じ脚本を、国違う二つのグループにまかせ、各自上演すると、きつととてつもなく面白い文化の宝石が現れるだろうと考えるだけでワクワクします。

そして、中国国内舞台役者の養成所もついに拡大化できて、人気公演の中国バージョンのロングラン公演も可能になりました。その時の私は、相変わらず早朝の空気を吸いながら走ります。時には井の頭公園に、時に上海の外灘に。

F/T キャンパスを受けて

キャンパスを終え、大阪に帰ってきてさっそく友人に東京でのことを話した。

それはそれで盛り上がったが、舞台について話し込める友人は一人しかおらず、四日間、あの大所帯で芝居について話し合ったのがとても特別なことだったんだということを改めて実感している。毎年このような機会を持ちたいなあ…

思い返してみても、本当に濃い四日間だった。企画側・参加者共に強い思いを持ってこの企画に取り組んでいたのがよくわかった。あの過密なスケジュールを疲れずに過ごせたのはその周囲の熱量に感化されたのだろう。

ああ、なんで大阪からの他の参加者がいないのか！寂しいなあもう！

キャンパスに参加が決定した時、芸術作品について大学などで専門的に学んでいる訳でもない僕は周囲に置いてかれないことだけを考えていた。噛みついてでも離れない、盗める知識は盗む気でいた。戦闘状態である。

ただその緊張も、キャンパスが始まって一日目を終える頃には消えていた。

だいたいみんな同じだと思った、不安や疑問を抱えてこのキャンパスに参加している。

“演劇、ひいてはアート作品は日本で今後どう生き残れるのか” “舞台を私ははっきり観れてる？” そんな風な疑問。(全員がそうじゃないし、勝手な主観だけ)

でもそれで安心した。きっと僕は最初、人外の中に放り込まれたような感覚になっていたんだと思う、不安とか超越したような。だからこそ安心した。僕もそういった不安をもっていた。地元が同じ人もいない中で、そんな所を共有できた気がしていた。(いやほんとに地元と会話のテンポも違って最初圧倒されて色々心細かったんだって！)

この四日間を使って僕も、芸術作品に対する自分の向き合い方、そんなものを様々な他者、アーティストと対話する中ではっきりさせようとしていたのかもしれない。まだまだ模索中だけど。

キャンパスプログラムには触れずに書いたが、一つ一つがほんとに宝物です。

特にアウトプットの重要性、身に沁みました。みんなに負けないよう自身の教養などを磨き、またお会いしたいです。

さて、大阪に帰ってくるとともに日常も戻ってきて、みなさんと同じようにやらなきゃならないことが山積みである。寒くなってきましたが、風邪などひかれませぬよう。

演劇がこのように社会の中で機能しているということを体感できる機会を与えてくれたキャンパス企画制作の皆様、そして演劇は息づいているということを教えてくれた参加者のみなさん、本当にありがとうございました

わたしの3年後のビジョン

自分の現場にて、状況を正しく把握し周囲の人間のフォローをしっかりと行う。

他の人たちへもしっかり気を配ることができるように。

共作などでいいから自分で作品を作る、その能力を育む。

三日坊主を止める。

わたしの10年後のビジョン

留まることなく作品を作る。

俳優としてであれば俳優として作品に加わる。

できれば家庭をもち、演劇以外に熱を注いでくれていれらうらしい。

F/T キャンパスをうけて

F/T キャンパスをうけて、どうであったか、ということを手軽に語ることは非常に難しい。かといって難しく話すことも難しいのだけれど。とにかく、この4日間を過ごしたことが、わたしの人生に多大なる波及効果を及ぼすであろうということは、じんじんと肌身に感じている。

そもそも、わたしは何故、F/T キャンパスに参加しようと思ったのか、それは簡単に言える。そうでなくても大学に入ってから約1年半、ワーカホリック気味でマラソンをし続けているわたし。とにかく、何か行動を起こさねば。誰よりも先に、誰よりも広く、誰よりも遠く。そんな風に考えながら、目の前に現れるものをすべて一期一会のチャンスと思って飛びついてきた。「わたしなんか」を頼ってくれるのなら、「わたしなんか」にやらせてもらえるのなら、そうやって自分をすり減らしてやってきた。そんなさなか、そろそろ限界も近いと思っていたものの、迷ったらとりあえずやっつけと、このF/T キャンパスにも飛びついた。

東京学芸大学の長い夏休み、昨年血眼になって動き続けていたけれど、2年生になることで責任が伴ったり、まあいろいろきつくなってきていた。そうして迎えた10月。限界を突破し、「お金もない、時間もない、スマホもない、何にもない」のないないづくし。F/T キャンパスを迎える前の晩も足らない睡眠時間に頭がおかしくなり「むりーむりー——」とつぶやきながら部屋をぐるぐると歩き回っていたそう。翌日、スマホがないため事前に行き方を調べて、ありったけのお金を銀行口座からおろして会場に向かうも迷子になる。オリエンテーションでも、みんなのビジョンが頭に入ってこない。「むりー」が頭に響くばかりだった。しかし、観劇し、みんなと話すうちに、面白くて仕方なくなってきた。もともと喋るのが好きなわたしにとってあの場所はなんでも喋れる安全な場所だったし、そのための時間と精神に余裕を持った（現世と隔離し余裕を持たせる仕組みを持たせた運営の手腕に脱帽）の仲間が集まっていた。こんな場所、みんなが気兼ねなく語り合える場所、学校でも家でもない、演劇という共通点はあるけれど、いろんな考えの人が集まったこういう場所がわたしはつくりたいんだ。ここがサードプレイスだ。これが終わってしまわなければいいのに。4日間という限定された時間が惜しい。こういう場所が、誰でもいつでも集える場所として存在できたらいいのに。わたしはこういう時間、空間を日本に世界にたくさん出現させるためなら一生を投げられると思った。こういう場所を求めて、物心ついたころから走り続けていたんだと思った。

でも、どうやって進んでいけばいいのかはまだよくわからない。何がそのための糧になるのかもよくわからない。それでもそのために勉強したい、そのために経験したい、そのために走りたい。いまはそんな風に思っている。闇雲といえそうなのだが、目指すべき船の方角は見えた気がする。

わたしにとっての本当の「F/T キャンパスをうけて」が書けるのはまだまだ先だと思う。でも、ここでやっつけ、ここまで走り続けてきた自分を褒めてあげたいと思った。闇雲にでも走っていたおかげでこの出会いがあった。闇雲に走る途中で死ななくてよかったと思う。

こんな風に熱く語ってしまうくらいに刺激的な時間でした。もっといろんな人にこの場所で出会ってほしいと思います。

わたしの3年後のビジョン

健康的な生活を送っていたい。

もし留学に1年いっていたら4年生、すらすらと卒論を書いていた。

ワークショップの企画や実践をたくさんして経験を積んでいた。

もし4年で卒業していたら、東京芸術劇場のプロフェッショナル人材養成研修を受けている未来もいいな。

英語で自分の伝えたいことを伝えられるようになっていたい。

人の居場所についてもっといっぱい考えて、何らかの形で実践していきたい。

どこかに根をはって活動したい。(できれば「東京」ではないどこか)

わたしの10年後のビジョン

健康的な生活を送っていたい。

そろそろ結婚していたい。

大学の非常勤とかによばれたい。

拠点を持っていたい。

教え子的な存在が欲しい。

F/T キャンパスを受けて

F/T キャンパスを経験して、一番印象に残っている言葉があります。F/T キャンパスでは観劇後に毎度近くにいる人と意見交換を行いました。劇を見て意見を出すことはとても楽しい作業ではあるのですが、以前の私には少し不安を感じる作業でもありました。劇を毎度理解出来るとは限らなかったからです。正直「わー楽しかったあ」とかそういう単純とも言える楽しみ方だけをしたい時もありますし…。無理矢理にでもひねり出そうと思って意識して劇を「みる」感覚を繊細にして『シカク』を比較して観た時とかは楽しかったのですが、どうしても理解しにくい作品（今回のでいうと私にとってはクリスチャン・ルパの作品）もありました。ルパの作品について考えを深める為に寮に帰ってから周りの参加者さんとお話した時、私はルパの作品についての自分の見解を照明効果と舞台美術などに絞って作品本体には触らずに話しました。実際、ストーリーについての理解は追いつかなかったで目に入ってくる舞台美術や照明効果をすごいなあと思って観ていたからなのですが、ストーリーを理解出来なかった事に対して少し引け目のようなものも感じていました。でも、その意見交換の時他の人から「自分なりの楽しみ方でいい」「自分達からしたらわからない事が面白いから話を聞きたい」という発言を聞いて、なんだかすごくストンとしました。私が直接言われた言葉ではないものもありますが劇の見方なんて人それぞれだから分からないものは分からないし、まわりと同じようにすきにならなくてもいいのだなあと思えました。それと同時に、いろいろな人の意見を聞いたことでかなり人によって見方が違うとこや自分がいかに偏った演劇しかみていないこと、また演劇には演劇だけでなく色々な分野のことが関係してくること（例えば政治とか、外国のこととか）を痛感して、もっと私は広い世界に放り出されて色々なものを吸収しないといけない、このまま演劇の中でぐるぐるしては何も発展しないなとも思いました。なんだろう・・・色々な意味で硬くなっていたことを思い知ることができた気がします。

これは色々なところから色々な人がきていたF/T キャンパスで、その色々な人と交流ができたから思えたことだなあと思います。自分をしるには他者との交流や自分がいない世界のことをしるべきだなあと強く感じることができました。よい経験になりました！！

わたしの3年後／10年後のビジョン

F/T キャンパスから一ヶ月ほどが過ぎて、そろそろ就活という物が目の前に迫ってきている。参加する前は、正直に言って演劇を仕事にしたいけれどそのために何をしたらいいかわからなくて、結局何もできていない状態だった。でも、F/T キャンパス中に聞いた「演劇やってる人なんてほしい社会に出て三年くらいしてなんか違うと思ってまた演劇にもどってくるもんなんだよ」という言葉が意外としっくりきていて、まあ社会にでて外の空気をしてそれでも演劇がやりたかったら演劇の世界にもどってきてやんぜくらいの気持ちでいてもいいかなと今は考えている。実際私は大学でも演劇や芸術系のことしか勉強してなくて考えが偏りすぎてしまっているところがある。偏った分それに集中できればそれでよいとおもうのだがどうも私は何をしても迷うたらしい。だったら演劇にとらわれすぎないでもっと自分の興味関心を横に広げてみてもいいのではないかな。広げた先で、自分が本当にやりたいことがみえてくるのではないかな？とキャンパスが終わってからつらつらと考えていた。このままだと3年後はもしかしたら演劇以外で自分が興味を持っている分野の仕事をしているかもしれない。

10年後はどうだろう。希望としては結局のところ演劇が好きでやっぱり私がやりたいのは演劇だ！と演劇の世界に戻ってきて、何らかの形で演劇に関わっていたいなと強く思う。10年の間に色々なことを知って、経験して、経験値が今の私よりはるかに高くなった状態で演劇の世界で生きていたらすごく幸せだろう。劇を見てもまた違った見方ができるようになっていたり、演技をするとしても10年分の重みをもった考察ができるようになりたいと思う。

色々と考えすぎて思考停止、行動停止だけはしないような生き方を3年後も10年後もしているような人間であることを今の私は願っている。

F/T Campus とその後の自分について石山寺の青葉と自分自身をリンクさせながら最後は4日間を共にしたみなさんに伝えたいことをつらつらと。

立教大学 現代心理学部 映像身体学科

川縁 芽偉子

参加者のみなさんはどのような心境でF/Tキャンパスに臨んだのでしょうか。私はあの時期、どうしようもない不安に苛まれていました。色々と辛い時期の終盤でした。不思議なもので今は、キャンパスでたくさんの人と出会えたこともあって、結構頑張っています。

キャンパスが終わってすぐ、滋賀県に住む親戚を訪れました。滋賀県には石山寺という大きなお寺があります。紅葉がとても綺麗な場所としても有名です。色づく前の紅葉を見て、祖母が私に言いました。「青葉に別れを告げるんだね」と。今思うと、夏の匂いが残るその葉っぱたちがキャンパスでのわたしと重なっています。

〈なかなか上手く喋れない〉〈なんだか刺激が足りない〉〈どうしてこんなにも伝わらないのだろう〉。あんなに葛藤するとは思いませんでした。観ているものは一緒なのに、こんなにも感想の視点が違うのかと楽しむ一方で、個人の枠を超え人類共通の記憶のような部分に触れてはいなかったかと、大きな声で言いたかった。あなたとわたしはどこかで繋がっているのだと、言いたかった。わたしの中に静かに流れ続けてきた思惑が打ちのめされたような気分で、このキャンパスを終えました。

しかし葉っぱはひとつの生命体として紅葉を向かえます。染まることを目的としているわけではありません。“美しい紅葉スポット”として人に見られたい訳でもありません。冬になったら葉は落ち、そしてまた芽吹きます。季節が巡る中で、そうなっていました。

キャンパスで経験したひどく落ち込んだ気持ちも苛々も悲しみもすべて、ひとつの流れの中で、〈そういうこともあるよね〉と今は落ち着いて言えます。

見知らぬ人の痛みまで背負いませんか。「誰も頼んでない」「勝手なことをしないでくれ」と言われてしまうかもしれません。ただわたしたちは今まで出会ってきた人々のために、未だ見ぬ人々のために、そうするしかないのです。全て地続きであると、そう思うのです。

にしがも創造舎のテントの下で話しかけてくれた、

夜のオリンピックセンターで語り明かした、

毎日一緒に温かいごはんを食べた、

『伐探』の後動けなかった、

一緒に「演劇」を作った、

電車の中で涙を流した、

そんなあなたの顔が浮かびます。

わたしの3年後のビジョン

GOETHE ZERTIFIKAT B2

DELF B1

合格

わたしの10年後のビジョン

家庭を築く。

F/T キャンパスを受けて

私にとってF/Tキャンパスは自分にもたらした影響として、全く予想と違う結果になりました。自分と同じ年頃の学生と舞台芸術そのものや作品の捉え方などを共に考え意見交換し、新しい考え方を得るための場であると、参加する前は考えていました。実際に参加して自分と違う考えや解釈、視点を共有するのはとても有意義な時間でした。しかし、自分にとって画期的な、新しい考え方を得る出会いというのとは少し違ったように感じました。それよりもあの頭がパンクするような四日間で様々な自分と出会った気がします。

恥を忍んで言いますと、焦っている自分、何かを誇示しようとする自分、無理に考えようとする自分、たくさんの嫌な自分を見つめる非常に貴重な機会になりました。大学4年生ということもあり、焦りが多くおそらく自分に今必要なこと、今有益なことを求めすぎていたのではないかと思います。舞台芸術という一つのジャンルの中でも、様々な方面に興味や知識のある仲間や、緩やかに自身の考えをしっかりと持つアーティスト、ゼミの先生との対話の中で、何のために、が重要なのではなく、まずは、今出会っていること、今感じていることを新鮮にかつ純朴に捉えることが大切なのだと改めて意識することができました。不安に駆られがちなの時期に、自分を省みることのできる場にいられたというのは代え難い機会でした。

それだけではなく、主にスペシャルトークの時間でこれから自分が向き合っていくだろうことへの多くのヒントをいただきました。量も多く、質も高い材料はまだ消化どころか整理さえついていませんが、これから更に学びを続けていく中で自分の中の落とし所を見つけられたらと考えています。

今回のF/Tキャンパスで、人はもちろん、作品や考える材料など様々な人やものと出会えたことは私にとってとても嬉しいことでした。最後に、F/Tキャンパスを企画運営して下さったみなさま、ゼミの先生方、対話の時間を割いて下さったアーティストの方々、参加者のみなさまに出会いをいただいた感謝（と、まとまらない質問や相談をしてしまったお詫び）の気持ちをこめてお礼申し上げます。最後の最後に、三泊四日というスケジュールは長いようで短かったので、もう少し交流を続けてもう少しパーソナルな関係を築けられればと個人的には思っています。私は家が近いこともあり、東京芸術劇場をうろうろしていることが多いので、見かけたらぜひぜひお声がけください！

わたしの3年後のビジョン

1年後に入る（予定の）平田オリザさんの無隣館が二年制なので、無隣館を卒業して青年団の制作として働く。青年団での制作の傍ら無隣館でアートマネジメント※の自主企画としてワークショップやより地域に開かれた上演方法など、実験的に行っていた活動を継続し、よりよい方法を探求する。

※芸術・文化と現代社会との最も好ましいかわりを探求し、アートのなかにある力を社会にひろく解放することによって、成熟した社会を実現するための知識、方法、活動の総体（慶應義塾大学名誉教授：美山良夫教授）

わたしの10年後のビジョン

北海道か、長野等の劇場でアートマネージャーとしてそれまでの活動のなかで得た方法で、地域と劇場、劇場と作品、作品と地域を結び、演劇が地域に持続しうる活動を行う。

F/T キャンパスを受けて

F/T キャンパスを受けてというレポートを書こうとすると、なんだか、なんにも書けなくて、ああ、やらなきゃって気持ちになって嫌になります。ので、レポートという形にそぐわないかもしれないけど、ぼそぼそと書けることを書きます。

初日、椅子を車座に並べて、参加者ひとりひとりが、今の自分の状態？気持ち？と3年後、10年後のビジョンについて話をした。約30名の参加者が出会って早々いきなり、こういう話をできるのは、贅沢で、そしてとても疲れた。ひとりひとりが譲れないことを伝えるために様々な話をする。話がのびのびと枝分かれしていく人、端的に話を終える人、話をしているようで周りをよく見ている人、耳が赤くなっている人、自分の番が回って来る前にやや疲れている人。30名がひとりひとり話すもんだから、聞いていても情報量が多すぎて、おお、ああ、情報量が、つてなった。

時間が限られている中で、はじめましての参加者同士で話を聞いて聞くことができた初日のあの時間は、F/T キャンパスという場所で味わうことができる魅力みたいなものが詰まっているような気がしました。

うーん。なんかぱっとしない。F/T キャンパスを受けて、院生生活残り1年、奨学金という名の借金を背負いながらどう生活していけるのだろう。今回一緒になった参加者は、どうやってこれから生活していこうと思っているのだろう。もっと話しかけて、聞ければよかった。でも、そこに踏み込んでみるってことは少し、聞くぞって覚悟が必要だと思ってしまって一步踏み出せなかった。せつかく、聞くことができる場所はあったのに。いやでも、よかったことは、F/T キャンパスが終わった後に、話をする機会を持つことができた人がちよろちよろいて、F/T キャンパス中では聞けなかったことが聞けたりしている。ああ、こうやって、ちよろちよろ、時に突然に、機会を得て、話ができる種を植えてくれたF/T キャンパスありがとうございます。

種を植えてくれる、植えられる場所は、なかなか貴重な場所だと思います。ので、毎年そういった場所があってくれたら、あるいは私自身もそういう場所を立ち上げることに関わられたら、それは、嬉しいことなので、コツコツ、やっていこうと思います。

わたしの3年後／10年後のビジョン

3年後、いきずり構成員5名に、劇作家協会新人賞受賞、いきずり国内ツアー、書く仕事、児童施設などでのアウトリーチファシリテーターの仕事が少しづつもらえるよう／10年後、いきずり海外ツアー、桜美林大学で非常勤講師、上富田町（和歌山県）で市民参加劇創作、ささやかなアトリエを持つ

F/T キャンパスから二ヶ月経った今

あ、あ、初めまして... 今野誠二郎です。白Tって呼んでください！あ、ハハハ

F/T キャンパスから、はや二ヶ月。

思い返してみると、これと言って身についたスキルはなかった。いや、一週間足らずで身につくスキルなんてあつてたまるか。

あの場は人と人を繋げるために開かれたものだった。

数年後に振り返ってみれば、何もかもきっかけだった、なんてこともあるかも知れない。

でもまだ何もスタートしていない。あ、俺が何もやってないからだ。

しかし！だからと言って！何かを始めようとしなくてもいいと思う！次会ったら、挨拶するし。興味あった人とは会うし。

案外、作家さんとか、俳優さんとかが少ない印象だったが、あの中の何人が演劇業界に進むのだろうか。この業界は狭いらしい。だからこそ、参加者全員がそれぞれその道に進めば世代の中で力を持つのは確実だ。今の内に出会えてよかったです。

自分は、世界を変えたいとかそんなおこがましいことは思っていない。自分の、自分たちの好きなように面白くやって行きたい。これからもよろしくお願いします。

双方の Wikipedia に学生時代からの友人でって書かれていますよね。

でも、一つだけダメだと思った。自分も含めてコミュニケーションが足りない。俳優や作家さんに必ずしもコミュニケーションがあるとは思わないが、その他、演劇を武器に社会に貢献しようと思っている人々にはもっと必要だと強く思った。このままでは、演劇という閉ざされた狭い世界で何かをいってる暗い集団になってしまう。

演劇はものすごいパワーを持っている、それは歴史とルバが証明してくれた。自信を持って外に働きかけ他の分野の人々の理解を得ることが不可欠だ。

わたしの3年後のビジョン

人の事を考える人になる

わたしの10年後のビジョン

ハリウッド進出

F/T キャンパスを受けて

とても興味深い四日間でした。大学では演劇学科に所属しているものの、こんなにたくさんの同世代の人たちと一緒に演劇を観て、語り合うことを、今までしたことはありませんでした。

絵画、映像、文学などの芸術と舞台芸術が異なる点として、“視点”を観客が恣意的に選べる、ということが挙げられます。例えば絵画はすでに画家によってあるシーンが切り取られています。映画も監督によって意図的に“切り取られた”シーンで構成されており、両者とも、観客は“視点”の選択に制限があります。しかし、舞台芸術は演出家が用意したシーンをいとも簡単に見逃すことができます。一人とても好きな役者が舞台に出ていて、彼ないし彼女しか眼中に無かった場合、その役者から少し離れたところでたった一瞬の、劇的に素晴らしい演出や演技が行われていたとしても、その観客は気づくことがないのです。これは極端な例ですが、舞台作品は視点（それは実際に“見た”ものでもあり、また、見方という意味も含みます）の自由度が高い芸術です。今回のF/Tキャンパスは、このことについてよく考えました。

F/Tキャンパスに参加していた人たちの発言は、私にとって非常に新しかったです。特に萩原ゼミでの議論は本当に楽しかったです。私が前の晩に観た作品への態度や感情が、彼らの“視点”によって変容していくのには興奮しました！一人が、あれはこういう理由からマンションに見えたと言い、先生が、あれはこういう理由から日本家屋だと思おうと言い、意見は正反対ではありませんが、見え方に間違いなど一つもないのです、私が／彼が／彼女が、そう見たのですから。議論は白熱します、そこに「それは間違っている」という否定の言葉はひとつもなく、「なぜ彼／彼女がそう観たのか」を掘り下げていきます。突拍子の無い意見にこそ、その作品をさらに面白く読み解く鍵が潜んでいたり、哲学が生まれたりします。ゼミを通して、自分の視点が増えたように感じます。議論の中で語られた彼らの視点が、私の中に入ってきたようです。

宿泊や団体行動において馴染めなかった部分は多々ありましたが、上記のような大きな収穫を得ることができたので、参加してよかったです。来年には大学を卒業してしまうので、次回は参加できませんが、F/Tキャンパスの益々の発展をお祈りいたします。

わたしの3年後のビジョン

ドイツに留学 ベルリン Udk (演劇教育学) かギーセン大学 (応用演劇学科)

わたしの10年後のビジョン

日本の地方劇場で中高生向け演劇ワークショップ

F/T キャンパスを受けて

わたしにとって今回のF/T キャンパスは、「芸術に対する様々な表現」を直接肌で感じるができる体験でした。

『シカク』、『Woodcutters — 伐採 —』などの観劇の意見交換の際、全くわたしの気づかなかつたところを指摘していたり、ある知識を持った上で作品について疑問に思っていたり、言葉では表現しきれないようなことを擬音語で表現していたりと普段経験できない表現力の豊かさが存在していました。でも、それは、舞台芸術が作品自体の演出そのものや、観客の個々の捉え方によって、各観客と一体となった作品を作り上げていっていたからだと思えば、舞台芸術の素晴らしさ感じ、嬉しくなって感動しました。特に、『Woodcutters — 伐採 —』においてF/T キャンパスメンバーが、自分たち観客の雑音が演出に反映されているのかを興味を持って個々の意見を出し合っていました。実際、反映されているだけではなく役者までもが観客の様子によって演技の仕方に変化があることがわかり、観客と演出の最高峰の一体感という物を感じました。

また、わたしの参加した文化政策の稲村ゼミでは、みんなが体験した舞台芸術による影響で共感できる人もいれば、舞台芸術が個人の一部のようにしている人もいることを知れる話し合いが出来たので楽しかったし、自分のこれからのことを具体的に考え直すきっかけを作ってくれたようにも思いました。ゼミ内容的には、主にF/T キャンパス、F/T のプロジェクトの評価をし、社会的なインパクトをロジックモデルを用いて考えました。それを受けて、スタッフ、学生、アーティスト、地方の人など参加者全員が知識、創造性、ノウハウを吸収でき、視野が広がり、これからの活動の参考になることが分かりました。これからも多くの人に舞台芸術のよさ、知識を知ってもらうために続けてほしいし、自分自身もリピーターになりたい！と感じました。ロジックモデルによって、学生、F/T スタッフ、アーティストなどの結果から成果を考えることでインパクトがどんどん見えてくるのが分かりました。その発見が楽しかったし、これから考える際に使おうと思います。

最後に、F/T キャンパスを受けてなにより、F/T の最新の舞台芸術の観劇や、意見交換によって都市と地方の差を感じてしまいました。地方にももっと人が来たいと思わせる魅力的な事業の実行ができる方法を今回の経験を参考にして考えていこうと思います。人々の評価基準は主観的なので難しいことではありますが、行動することが大切だと勇気づけてもらった今、思いが強くなりました。

4日間充実しすぎていました！ありがとうございました。

わたしの3年後のビジョン

大学4年生のわたしは学校のある浜松で芸術イベントを企画して実行する、頑張りたいことの習い事をする、いろんな場所に行って芸術鑑賞できるような余裕をもつ、中国語である程度会話できるようにする

わたしの10年後のビジョン

28、29歳ごろのわたしは地元、静岡の魅力を多くの人に伝える仕事に就く、人の繋がりを多くする、趣味を持っているようにする

F/T 自分との出会い

F/T キャンパスに参加した4日間、“ものすごい”経験をした。短い期間に新たな人や作品との出会い、白熱した議論、自分の中の変化があり、目まぐるしくも充実した非日常体験になった。

夏の初めにF/T キャンパスの存在を知り、このような集まりに私は果たしてついていけるのだろうかという不安を持ちつつ、飛び込んでみようと呼募をした。キャンパスを終えて、まとめとして書きたいことは山ほどあるが、今回は自分の思いや意識の変化について特筆したいと思う。

まず、受講前の3年後10年後のビジョンは自分の『普通』の感覚で記述したものを持参したが、他の参加者のものを見て、『普通』とは何か考えさせられた。また普段関わる仲間ほとんどが地方出身者なこともあり、常にあらゆる芸術にアクセスできる環境にいる人たちとの接触は新鮮でかなりショッキングなものだった。

観劇やゼミではこれまで摂取したことのない演劇を見て歴史的背景や作品そのものについて学び、他者の考えを聞き、自分の考えを言語化するということの面白さやむずかしさを感じた。自分自身の読解力・語彙力不足を如実に実感した。期間中に何度かあったクリエイターの話を書く機会は、鑑賞前後に作り手に接することで、作品の新たな解釈が生まれ、作り手自身の背景と作品とのかかわりを知ることができた。

キャンパスを終えての自分の変化として、芸術・自分の芸術の消費・日々の生活への意識の変化が挙げられる。文化の中心である東京で芸術の現場を垣間見て、決定的なきっかけがあったわけではないが芸術文化そのものに仕事として関わりたいという意思が薄らいだ。私は年間約110本ほどアート作品を消費しているが、私は自分の消費スタイルとどこに演劇のどこに魅力を感じているのか疑問に思っていた。どちらも解決には至らなかったが、今後それらを理解し、言語化するための自分の言葉を持ちたいと思った。また、消費を自分とアートへの投資だと捉え「自分に正直」に続けていきたいと思った。

私は今回のレクチャーに関して、完璧に理解することではなく、今の自分について知り断片的にでも芸術文化について知識を深めることに重きを置くことができた。また尊敬できる仲間との出会いも重要な成果であった。

よく観察すること、語彙と知識を増やすこと、現状より少し高い壁を超えること、アンテナを広げること、つながりを見ること、これを心に置き芸術文化を学んでいきたい。そして、今回の“ものすごい”経験を自分の言葉で言語化できるようになればと思う。

わたしの3年後のビジョン

たぶん就職している。芸術文化の現場かそうでないかはわからないが、仕事に行って、凹んで、残業をして…社会の歯車として生きている。芸術文化に関する仕事をしているならば、支援や環境づくりの仕事をしていたい。

たまの休みには舞台鑑賞や美術館に行き、非日常にいる。非日常の作品を消費する中で、日常の自分に気づいたり、現実逃避をしたりしている。人間的に「なぜか気になる」人の話をたくさん聞く。

忙しくても、何かしらの勉強は続けたい。情報に敏感でありたい。アートに関する知識の増強と少しは英語を話せるようになる。

↓

いろいろな土地を訪れたい(たぶん落ち着いてられないと思う)

↓

わたしの10年後のビジョン

30歳になるので、今後の身の振り方についてよく考えているところだと思う。社会的にも成熟して、仕事もある程度のキャリアはあると思う。もし家族がいれば、自分より家族にとって生きやすい生き方を考えると思うのでライフスタイルは全く分からない。もし一人だったら将来が心配なので、それなりに慎ましく暮らす。

10年後もアートの鑑賞は続けていたい。鑑賞もいいけど、ある程度様々な世界を見てきて感じたものがあると思うので、自己満足かもしれないが作品にしてみたい。演劇・本・手芸・料理・映像、どんな方法を使うかはわからない。

そのとき関心を持っていることについて学び続けたい。常にアンテナは張って生きている。将来、料理と裁縫がうまくてかわいいおばあちゃんになるための修行中だと思う。

2016年10月21日～24日 F/T キャンパスに参加して

青山学院大学 総合文化政策学部 総合文化政策学科
鈴木 えりか

今回F/T キャンパスに参加して、普段の自分の生活では出来ないようなことをたくさん経験することができました。4日間連続で何らかの舞台を見るのは初めてだったし、出会ってすぐの人々と演劇を作るという経験も新鮮で、毎日が新しい発見や視点の取得へと繋がっていきました。

まず演劇を見る際に、色々な見方が可能なのだなと感じました。今までは純粋に作品を楽しみ、面白かったなと感じて観劇が終わってしまいがちでしたが、このキャンパスを受けて、一つの視点だけでなく視野を広く持って舞台を観ることを意識するようになり、ごく普通のストーリーと捉えていた演劇にも強いメッセージ性を見出すことができたり、その元となる歴史的背景や原作にも興味を持てるようになったり、今後の観劇ライフがとても有意義になるだろうと感じる点が多かったです。

毎日が本当に刺激的で、プログラムの内容もちろんです。参加されていた他の学生の方々の話を聞くことで、今まで自分にはなかった考え方を認識させてもらえることが多くありました。相手の意見を聞いて納得し、また新しく自分に生まれた意見を相手に伝えて、この繰り返しを何度もしてどんどん自分自身が成長していったのではないかと感じています。同じようなものにも興味がある皆さんと交流ができたことに感謝しています。2日目の夜に開催されていた六本木アートナイトに行くことができたのも、よい思い出です。

また、高校生の時からずっと支持していた「ままごと」柴先生のゼミで、【他者と演劇を作る】をテーマに、一つの作品を作り上げることができ、大きな達成感を感じています。課題となっていた不必要なものや、キャンパス中に気になったものは、周りをよく見ていないと見つけられないなと感じ、いつもより生活をまじめに行うようにしました。そうすると、今まで通っていた道のはずなのに知らなかったところや、見ていたはずなのに気づいていなかったところがたくさんあり、また新しい発見をすることができました。他の2つのゼミの発表も驚きの連続で、より一層学びを深められました。

確かに舞台は余暇時間を使って観るものだ、と言われますが、舞台によって感受性が豊かになったり、視点や見方が増えたり、人として成長することができるのだなと今回このキャンパスに参加して身をもって感じるすることができました。参加できて本当に良かったです、ありがとうございました。

わたしの3年後/10年後のビジョン

3年後、メディアを通して演劇や舞台を伝えられる人になる

10年後、今度はそれを海外に持っていける人になる

私は、F/T キャンパスを受ける前にこのように記述をしていました。今回のキャンパスを受けて、この思いが変わったかどうかと聞かれると変わってはいないのかなと感じます。ただ、この思いが強くなったと感じます。

メディアと表記をしていますが、たとえどのような形態でも、もちろん営業だとしても、舞台を【伝える人】という立場で支えていきたいなと思っています。このことは10年後になっても続けていきたいし、私の根本的にある感情や想いである、とキャンパスを通じて感じるすることができたと思っています。

海外に届けるためには国内できちんと伝えることができたらと思います。そのため10年後にそのような仕事ができているかどうかは分かりませんが、自分のやりたいことに自信を持って進んでいけたらいいなと思います。

また、これらにプラスして「演劇教育」についてもっと考えていけたらいいなと思っています。この思いはF/T キャンパスに参加したことによって得ることができました。参加されていた多くの学生の皆さんと演劇について話し、討論をして、自分の中にも芽生えた思いです。私の身近な人に、演劇に興味を持ってない、と「演劇」というワードが聞こえただけで、きちんと調べずにパッサリと遮断をしてしまう人もいます。伝えてもちゃんと受け取ってくれない、もしこの人が小さい頃に少しでも面白いと感じる演劇を見ることができていたら、とふと考えたことがあります。小さい頃の影響は大きいと、20歳になった今よく感じます。私自身も両親が劇団四季のファンクラブに入っていた関係で幼稚園生の頃からミュージカルを見る機会があり、今そのおかげで演劇という生ものを好きになれていると思います。しかし運動音痴でスポーツにはうまく馴染めず、オリンピックなどの話題には疎い自分があります。すべてのジャンルに精通することは不可能だと思いますが、多くのことを学びたい、多くのものを観たい、という思いを小さい頃から持つことができれば、きっと少しずつ山のようなことを自分のものにできると思います。とりとめのない思いを書いてしまいましたが、これからも【伝える】ことを意識して、10人いたら10人に、それぞれに響く10種類の形で、演劇を伝えていける人になりたいです。

F/T キャンパスを受けて

F/T キャンパスを通して得たもの、それは【夢を具体化できたきっかけ】である。

F/T キャンパスに参加した当初の目的は単なる興味に過ぎなかった。一万円の参加費だけで演劇が観れて、共通の趣味をもった仲間とも出会える、こんな貴重な機会は滅多にないだろうと思い、参加を申し込んだ記憶がある。また、大学で学んでいる分野とは全く異なったゼミも凄く心惹かれるものであった。【文化政策ゼミ】にした理由は、「将来自分が舞台を支える仕事に就きたい」という漠然な夢を持っていて、一番現実的で良いかなと思い選択した。この「なんとなく」な「漠然」とした気持ちでの応募が、まさか自身の夢を具体化できるきっかけになるとは、この時は予想していなかった。

一日目に行ったオリエンテーションは凄く緊張した。しかし、自分よりも周りの皆の方が緊張していた。年齢も住んでいる場所も、もちろん目標や夢も…。十人十色な仲間たちで溢っていて、皆の自己紹介を聞けば聞くほどますます興味が湧いた。オリエンテーションの自己紹介は凄く充実した時間だった。

そんな個性豊かな仲間たちと行った【文化政策ゼミ】は刺激あるものであった。ひとりひとりが真剣に「演劇のマネジメント」について学び、話し合い…意識の高い仲間たちと語り合えたことは凄く自分にとって大きな刺激となった。また、稲村先生から教わったロジックモデルは、今後イベントを企画・運営する際に必要となる考え方のプロセスを身に付けられた。このゼミに参加したことで自分の夢を見つめ直すことができ、新たにやりたいことが見つけられた気がした。そして、もう一つの課題に記された「具体化された夢」を思い描ききっかけとしてゼミは私にとって貴重な経験となった。

話が変わるが、私が、さまざまな公演を観たなかで一番印象に残ったのは『シカク』である。音楽がとても不思議で、一度聞くと永久的に脳内に流れるような感覚だった。それにマッチした振付は意外と単純だなと感じた。しかし、単純な動作こそストーリーが想像できやすいと感じた。「日常の動作からインスピレーションを起こしている」と井手さんは終演後に行われたトークで答えていた。だからこそ、そう感じたのかもしれない。私にとってダンスとは、正直、「音楽の付属品」という感覚であった。今まで観たもの、体験したものがそうであったから、この感覚が身についたのかもしれない。しかし、ダンスも立派なエンターテインメントであり、親しみやすい主役であるんだなと『シカク』を観劇してそう感じた。素敵な作品と出会えて良かった。

わたしの3年後／10年後のビジョン

【F/T キャンパスを受ける前】

3年後…野外でのアートスペースをつくる

10年後…演劇、音楽ライブ、アート作品などを集めて野外アートイベントを開催する

【F/T キャンパスを受けた後】

3年後…たくさんの野外イベントへ行く、仕事をしたい。

来年からはじまる就職活動は野外イベントの企画・運営が行える仕事に就きたい。

→イベント運営・スキルを身に付ける。

そこから野外アートスペースの夢を実現させるための下準備をしたい。

野外にこだわる理由…自身が音楽ユニットとして活動していた際、路上ライブを行っていた。その際に、路上ライブは「人と人が音楽で繋がる」ということを体感し、路上ライブの楽しさを感じた。また、近年流行している ROCK IN JAPAN や SUMMER SONIC といった音楽ライブを観に行ったとき、開放感や臨場感や天気によるハブニング…といった野外でしか味わえないライブ感がたまらなく気持ちいいと感じた。

「人と人が音楽以外での芸術でつながる場」として「劇場やハコでは味わえない開放感や臨場感、ハブニングの空間」をつくりたい…そこから野外にこだわっている

10年後…身に付けたスキルを武器に野外イベント企画する

そこから、野外アートスペース制作に取り組む

⇒最終目標として、その野外アートスペースを新たな芸術場として残るものとさせたい

そして、その場でさまざまなアーティストを呼び、イベントを開催したい。

F/T キャンパスを受けて

「私がF/T キャンパスのインパクトです。」

とんでもないことを言ってしまったのではないかと、今でも思っている。

後悔はしていない。

私にとって2回目のF/T キャンパス。違和感と苛立ちと共に過ごしていた4日間。

チェックインや選択ゼミで参加者の皆さんが話す、まっすぐで美しい物語を、私はとても眩しく、危ういものを感じながら聞いていた。私自身も芸術に力をもらった「美しい物語」を経験していたし、私自身が周囲からその物語の主人公として扱われることも少なくなかった。これからも芸術のもつ力を信じていきたい、とも思っている。だが、芸術はすべての人にプラスな影響を与えとは限らない。まして、芸術に関わる人間が無防備にその力を信じることはとても危険だとも思っていた。だからこそ、芸術のこれからを担うかもしれない同世代が、疑うことなく「芸術って素晴らしい」と考えていることに違和感と苛立ちを感じていたのだ。

以前の私であれば、そういう考え方もあるよね、と受け入れることができたように思う。しかし、あの時の私は確実に苛立っていた。昨年のキャンパスを終えて、自分には批評的な視点が足りないと感じていた私にとって「他人に苛立つことができる」ということは大きな発見であり、成長といってもいいのかもしれない。以前の私なら、気にせず受け入れられていたことも、ちょっと待って、と押し返す強さと、違和感の正体について考えることができる新たな視点を、今の私は獲得したのである。

しかし、それと同時に、私は言いようのない孤独に襲われていた。「私だって美しい物語を信じたいし、それができたら楽だよなあ。でも、それは違う。そんなただの自己満足だ。こんな偉そうな考え、誰にも話せないなあ。というか、そもそも私は一体何様のつもりなんだ…」頭の中は自問自答でいっぱいだった。

そうして迎えた最終日。イセ氏とファイルズ氏とのトークで、私は救われた。「自分を信じること。自分を信じてもらえることを信じること。」という言葉。はっとした。私が正しいと思うこと、面白いと思うことを自分自身が信じなくて、誰にそれが伝えられるのだろうと。自分の意思とは関係なく涙が出てくるのは久しぶりだった。私は、自身を信じる勇気をあの時間に受け取ったのだ。

キャンパスから1ヶ月が経って、不思議なことに、もう一度会いたい、と思うメンバーがたくさんいる。あれだけ苛立っていたのに、会いたいと思う。元気にしているだろうか。私が描いている夢とあなたが描いている夢は似ているようで違うはず。もしかしたら、またイライラするかもしれない。でも少なくとも無関心ではられない。今の私にとって、その違和感が最高に面白いのだから。

「私がF/T キャンパスのインパクトです。」

いつか胸を張って、言える日が来るだろうか。

決して美しい“だけ”の物語にならないように、これからは生きていきたい。

そう言える自分の強かさに気付いた秋だった。

わたしの3年後のビジョン

- ・大学院で教育について勉強している
- ・英語をそこそこ話せるようになっている
- ・劇場での演劇の教育普及活動に関わっている

わたしの10年後のビジョン

- ・劇場に勤めている
- ・演劇の教育普及活動を行っている
- ・国内外問わず、さまざまな地域の人と演劇をつくる企画を実行している
- ・英語をかなり話せるようになっている
- ・自分の子どもと稽古場で遊んでいる

F/T キャンパスを受けて

いま、終了後約一ヶ月が経って思う「F/T キャンパス」は、その外の世界やそのあとの日々を全て忘れさせるほど濃密だった。帰りの電車でも、全速力で走り終えたあとのように頭がぼんやりとしていて、翌日からの時間割がうまく思い出せなかったのを覚えている。

初日、明るい会議室で円く椅子を並べて参加者の顔を見渡した。たくさんの知らない顔があり、これから始まるプログラムの一つ一つにワクワクしていた。しかし、待っていたのは想像していたほど楽しいだけの時間でもなかった。観劇し、話し合い、アーティストとのトークを聞き、ゼミを受け、議論し…というのを朝から晩まで休みなく繰り返した。今までこんな経験はなかったし、参加者一人一人がそれぞれ自分の強い思いを持っており、話しているとその勢いに押し流されそうになる。ゼミでも、私はなかなかスピードの速い議論についていけず、ただみんなの生き生きした表情を眺めていた。

そんな悔しさのあと、マレーシアのアーティストとの交流があった。彼らは、決してとても美しいというわけではない英語で、自分のプロジェクトのこと、作品のこと、私たちに語りかけてくれた。彼らがアーティストとしてやっていることは、とてもシンプルなことのように思え、その分コンセプトにも共感できた。前夜まで、舞台作品の端々に偏在する細かい要素をつまみ上げては捏ねくり回すような議論をして頭が疲れていたせいもあり、彼らの明るい発想と「彼らとコラボレーションするなら何を？」というグループワークは、短い時間ではあったが、私を解放してくれた。東南アジアのアートは、分野として今までさほど興味も持たずにいたが、欧米にはない感覚と自由さと、なにより明るさが滲み出る、いまの私が求めているものだった。

何をしなければいけないと決まっているわけではない。でも、自分はなんとなく、周りからの影響で日々凝り固まっていて、同じようなものばかり見て、同じようなことばかり考えている。ふとしたきっかけで出会ったものが、まさに自分の行くべき場所であることがある。

F/T キャンパスを終えて、私は、「わたしの言葉で思考しなければならない。」と強く思った。ペースを人と合わせる必要はないが、今自分が考えていることを、ゆっくりとでも言語化すること、それが、考えるということだから。いろんなことをひたすら経験するだけでなく、振り返ること、ことばにすること。あと、まだ、行ったことのない国、場所へ行こうと。

わたしの3年後のビジョン

3年後の2019年11月、わたしは（3年生終了後、1年間休学をしたため）大学卒業を目前にしている。「創造的な場作り」をテーマにした卒業論文の最後の追い込みをしている。興味を持っていた会社へエンジニアもしくはデザイナーとしての就職が決まっているが、わたしはそこで1年働いたのち、本格的にアート・マネジメントを学ぶため留学する予定だ。TOEFLのスコアは既に受け入れの基準を満たしている。春に日本初のコントラダンスのイベントを開くための計画をしている最中。

わたしの10年後のビジョン

10年後の2026年11月、わたしは、日本ではないどこか、にいる。おそらくシンガポール。ここで子供を産み育てようとしている。東南アジアをテーマ・拠点とした芸術祭やアートプロジェクトに関わっている。数年後にNPOの立ち上げに関わる予定。東南アジアの国々はもちろん、ヨーロッパや北アフリカ、中東、アメリカ東海岸へもちょくちょく行く。東海岸に行ったら必ずコントラダンスに行く。マルコスに会いに。

F/T キャンパスを受けて

F/T キャンパスで過ごした時間はあまりにも濃く、私の心に強く残ることとなった。触れた作品や出会った人々の豊かさには、4日間という短い期間であったということを忘れさせる。演劇や舞台芸術に関心がある学生が集まり、一緒に演目を観劇し、講義を受け、ディスカッションをするというのは他では決して経験することができないだろう。

○観劇及びディスカッション

ジャンルの異なる演目の観劇は実に興味深かった。普段自分ではなかなか観ることない作品を味わうことができたのは新鮮であったし、新たな舞台の入り口を開けられたように思う。特に『Woodcutters — 伐採 —』では海外演目という点や、体験したことのない長時間の鑑賞、更に実際に演出家であるルパとのスペシャルトークの時間を設けて頂くなど大変貴重な経験をさせて頂いた。スペシャルトークの前には学生同士で内容をディスカッションも行ったが、他学生の豊富なものの見方とそれを言葉にしていく力に私は圧倒されてしまっていた。今思えば、キャンパスに参加するまで私は、観劇した作品に対して深く掘り下げて考えることを積極的にやったこと、ましてや他人と感じたことを意見をぶつけ合うということをしたことがなかったように思う。観劇して、一時的に笑ったり、泣いたりするという楽しみ方しらは知らなかったのだ。「何故、この場面で役者はどのように動いたのだろう」「この舞台美術、あの照明にはどのような意味があったのだろう」「そもそも何故演出家はこの作品を作ったのだろう」……こういった疑問を持った参加者の様々な考えをディスカッションで聞き、初めての感覚の「面白い」を知った。また、様々な知識があることも、ものを見ることに対してプラスに働くことも強く感じた時間でもあり、読書などを通して「学びたい」と思うようになった。舞台の楽しみ方というもの決して1つではないと思う。娯楽として単純に楽しむ見方、そして能動的に関わりあいながら楽しむ見方。「舞台芸術」の面白さ、奥の深さを改めて感じる事ができた観劇体験であった。

○選択ゼミ

私が参加したのは、稲村先生の文化政策ゼミ「演劇を取り巻く環境をマネジメントから考える」プログラムである。演劇、マネジメントともに専門的に学んだことがなかったので初めは不安もあったが、自分達の経験を軸に考えていくことができたのでとても分かりやすく学ぶことができたように思う。演習では「F/T キャンパスが与える影響」をロジックモデルを使いながら整理してみると、想像よりもはるかに多方面にわたることが分かり、一参加者としてとても嬉しく思う。ゼミでのディスカッションでは「F/T キャンパスが演劇に関わっていった学生達の入り口として認知されるようにしたい」という話も上がった。今回私が参加したという事実が今後どのように私や、そしてまわりの人へ影響を与えるのか楽しみである。

F/T キャンパスに参加することができたこと、心から幸せに思います。

F/T キャンパスで出会った全ての方にお礼を申し上げます。そして、またお会いできるのを楽しみにしています。ありがとうございました。

わたしの3年後のビジョン

人を幸せにできる空間づくりに関わる。

わたしの10年後のビジョン

大好きな人達と一緒に笑っている。

ものづくりの楽しさを沢山の人達とシェアしている。

F/T キャンパスを受けて

参加する前から期待があったが、実際にF/T キャンパスに参加して本当によかった。僕がキャンパスに特に期待していたものは何より同世代の演劇に興味のある学生との出会いだ。僕は9月まで一年間ドイツに留学していて、その間に現地の演劇に足しげく通ったほか、海外公演を巡回している日本の劇団の作品もいくつか観劇することができた。地点やチェルフィッチュという名前は今でこそ知っているが、去年までは「ふーん、そんな劇団があるのか」という感じだった。観劇してみて衝撃を受けたのを覚えている。ドイツに来てから観る劇観る劇が驚きの連続で、それに対して自分が今まで観てきた日本の演劇はただドラマをなぞっているものばかりだと思っていたが、それは単純に自分が知らなかっただけだということに気付かされた。これはもう少し勉強しなくては、と意気込んだのはいいものの、住んでいる静岡県には演劇の話ができる友人は少ない。ましてや静岡以外の日本で活躍している劇団のことなんて名前さえも分からない。演劇のことに詳しい友人がほしい、と悶々としていたときにF/T キャンパスのことを知り、これ幸いと応募した。演劇の友人がほしいと思った理由ももう一つある。文系学問が軽視されるなか、あるいはオリンピックが迫っているなか、果たして演劇好きの学生は将来にどんなビジョンを、どんなキャリアモデルをもっているのだろうか、あるいは今の世の中に演劇をどう浸透させていくつもりなのか、率直な意見を聞いてみたかった。その願いはおおむね叶えられた。意見は人それぞれだが、みんな悩んでいることが分かった。

3年後/10年後のビジョンを最初の自己紹介で話したときに、演劇教育について触れている参加者が多いことに驚いた。僕自身も演劇教育が大事だろうと考えていて、今の学生は似たようなことをみんななんとなく肌で感じ取っているのだろうかと思った。僕の書いた3年後/10年後のビジョンは理想として書き、どこか諦めた感情をもっていた。それは青少年のための劇場を運営するというものであったが、まず人が集まらないだろう、お金が得られないだろうと思っていた。まだどこかそう思っているが、キャンパスに参加して諦めが少し希望に変わった。キャンパス以前は妥協とか諦めという言葉にリアルを感じていたが、それはもしかしたら同じ夢を語る同世代の仲間がいなかったからかもしれない。仲間と議論し、現実とすり合わせて、最終的に何か形にするというのは演劇創作の基本的な態度ではないか。僕には友人を信頼して最後には想像以上のものがつくれるという経験が足りなかったのだ。

それから、ビジョンの話で演劇以外の話をする人もちらほらいたのが新鮮だった。僕は勝手に演劇にしぼってしまったが、そんな制約はない。みんな自由でいいなと思った。特にそう感じたのはゼミの時間だった。実技のゼミで、2、3人のグループでシーンをつくるというものであり、僕は単純に会話をつくろうとしたが、同じグループになった他2人がそれをさせなかった。シーンをつくれという課題が出て、しかも時間がかなり限られているのに他2人はひたすら、この身体がどうだの、このモチーフにはこんな意味があるだの抽象的な話ばかり展開させて一向に決まる様子がない。僕が会話劇をさせようとするとうつろいながら、実際になんといわれたかは忘れたが、そんなものはつくりたくない、みたいなものだった。喝を入れられたときに正直、面倒くさいな、と思ったものの、どこか嬉しくてニヤリとしてしまった。結果、観客から観たらよくわからないシーンができたが、僕らは満足だった。観客は僕らのつくったシーンをどう解釈するのか、僕ら創作者のズレを楽しみにしていた。僕が仕切ってしまったら、あのシーンはつくれまい。世の中面白い人がいるもんだ。しかも同世代にもいるのだ。そのことを強く実感できた。

3年後、

大学院を無事に卒業し、社会人1年生として仕事に慣れるのにあくせくしていた。仕事場所は地方の文化施設で、そこでは地方の芸術活動の活性化のために様々な活動が行われている。夜や休日は地方劇団に所属して稽古に通っている。ひっそりとしたビルの一部を劇場に改築して演劇活動をしている。劇場にはバーがあり演劇をみたお客さんや他劇団の人とも交流できる地方演劇コミュニティのひとつの中心となっている。空いた時間にはせっせと観劇し、劇評を書いている。たいていは全くの趣味だが、ときにはお金をもらう。

10年後、

あれから7年、文化施設での仕事にも慣れ、自ら企画することも多くなった。仕事と劇団の活動を通して得た人脈を頼りに劇評サイトを立ち上げることができた。公演の宣伝にもなるということで共感してくれる劇団も多く、手ごたえを感じている。年に一度まとまった小冊子をつくっている。劇評だけでなくコラムやインタビュー記事もある。

来年には休職してドイツの青少年劇場に研修に行く。青少年が演劇を通して議論し表現する場所をつくりたいという願いから日本にも演劇学と教育学に裏打ちされた劇場を設立する話を関係者の間で進めている。教育機関と連携して運営することになり、まだまだ課題は多い。ゆくゆくは学校とは別の、子どものためのサードプレイスとなるような劇場を設立したい。

30年後、

青少年劇場を運営している。今では青少年劇場は全国にいくつかある。レパトリーはすべて青少年向けのもので、プロの俳優と町の青少年が舞台にあがる。レパトリーの作品には対象年齢が設定されていて、観劇後に授業で扱えるようなガイドがついている。定期的にワークショップも行う。ワークショップは子どもだけでなく顧問向けのものもある。年に一度はフェスティバルを行い、大人子ども交わって交流できる。年行事に合わせたプログラムも用意する。ロビーは開かれていて、子どもたちが気軽にやってきてはおしゃべりをしている。

F/T キャンパスを受けて

今現在、人文系の学部に在籍しています。普段は皆それぞれに研究をしているので、舞台芸術に関心を持つ学生がこれほど大勢集まる機会はありません。普段から舞台は観ているつもりです。そのため、今回の公演プログラムを個人的に観たところで、作品の理解度やそれに対して抱く感想は変わらなかったと思います。にもかかわらず、F/T キャンパスの開講から約一か月過ぎた時点で一番印象に残っているものは何かと聞かれたら、『Woodcutters — 伐採 —』公演を観た夜に宿泊所でみんなと交わした会話ということになるでしょう。一筋縄ではいかない作品に対してこんなにも色々な見方が存在するのかという驚きよりは、ただ今夜観た芝居を着に酒を呑むという憧れのシチュエーションが実現したことが嬉しかった。普段は呑まないたちですが、あの日のビールは美味しかった。

キャンパス全体の印象に関しては、予想が当たった部分と外れた部分があり、後者の方が多かったのが我ながら意外ではありました。時に今見た作品がよく分からなかったと言ったり、また時に将来このようなことに挑戦したいと言ったりしている他の学生を、一步離れた距離から眺めている自分がいたことに驚きました。参加前は、自分もそこに混じって同じように話すだろうと考えていましたから。思いを交らせるように話す他の参加者とともに、最終日に講師のどなたが仰っていた、「これだけ感受性が強いと、むしろ生き辛いかもしれない」という一言を思い出します。学生同士で話し合ったことの内、こんな話を今まで誰もしたことがなかった、と思えるようなものはありませんでした。そんな話はさして珍しくない、大学院とはそういった場所です。さほど年が離れているわけでもないのに、若い学生の奮闘をなぜか微笑ましい気持ちで、つまりは一種の親目線で眺めていた四日間でした。逆に言えば、誰かが必死になっている様を見せつけられるのは久方ぶりでした。

どうして予想だにしていなかった、このような距離感が現れたのかは未だ分かりません（単にそれなりに年を取ったということなのかもしれません）。一般的に、予想だにしていない事柄と出会いたいから人は新しいことを試みます。それと同時に、今後このような場所にかかわるならば、自分はそんな若い人の情熱を手助けできる立場としてかかわりたいという、これまた今まで全くなかった考えを持つようになりました。その意味では、ここに参加した甲斐はあったのだと思います。

わたしの3年後のビジョン

仕事をしながら、今までとは違う形でどうやって舞台と関わっていけるのか試行錯誤している

わたしの10年後のビジョン

家庭を持って、子供と一緒にワークショップに参加している

F/T キャンパスが私に教えてくれた

私は自分にとっての演劇とは何か、また沢山のアーティストや同じ演劇という芸術を追求する同世代の大学生と交流する上で、彼らを動かす原動力とは何かを考察する為にこのキャンパスに参加した。私は稲村ゼミで文化政策を学んだ。これは、F/T がどのようなプロジェクトで行われているのか。目的、計画、実行からの成果（評価）をロジックモデルに組み立て、観客や制作側に変化をもたらしているのかをマネジメントの立場から考察します。初めにみんなの前で演劇を知った経験と自分に与えた影響を発表する演習にはとても時間がかかった。私はあまりその経緯を人に言わないため、なんて言えればいいかわからないものだからだ。しかし、自分自身の事を分析出来なければ、大きなプロジェクトを立てるにも、その起因や望んだ結果を生み出せないのだ。全員がF/T キャンパスとフェスティバルのロジックモデルを発表用に考察した。これは難しかったというより息が詰まりそうだった。どちらもアーティストの活躍場を増やし、日本や海外のグローバルの拡大や、ネットワークを作る、ディスカッションの場を、コミュニティの場を設ける、次のフェスティバルに繋げようとするコンテンツを獲得、ブランド化の強化など私達への影響力がある成果や結果はあったものの、これが将来、具体的に次に貢献出来るかははっきりとしていないからだ。私は曖昧な考察はなるべく避けたい。いつも周りに混乱を与えてしまうからだ。しかし、今回は制作に携わる学生や演劇を教育として活用する方、そして全員の意見を全てまとめ上げた稲村先生などから芸術祭についての未知なる可能性を見出せた。それはもっと考える余地があるのではないかと思う。

私達は大学生、各々が持つ研究や創作について更なる高みへと歩むのが必要だ。その為には出会えるアーティストや制作者から得られるもの、盗めるものを獲得すべきだと思う。大学生は基本、文系や理系も週5の授業があり、長期休暇以外に交流できる時間は限られている。また、演劇の公演を生ものとして見るのなら、それは一瞬である。今、この場でない限りもうその作品やアーティスト（演出家に役者）と交流が出来ない。一般的な劇場公演だけではなく、海外とのネットワークを持った芸術祭は、メディア化されるのが少ないためとても貴重である。私たちが合宿を通して観た作品もそうであるし、私達が出会った事も同じだ。みんな同じ作品を観たけれど、それぞれの印象は全く違う。『シカク』も『Woodcutters — 伐採 —』も毎晩遅くまで話し合っ、互いの意見を必ず尊重しあった。私なんか四時間上演した『Woodcutters』に集中力が切れて寝てしまったのに、ある人は「どうして眠ってしまったのか、聞きたい。逆にどこが良かったと思う？」と聞いてきたのには驚いた。普通はつまらなかったから寝たのだろうと決めつけるものなのに聞いてきたのだ。実に面白くて変わった人だった。それが、よりみんなが演劇人である証拠だろう。因みに私は裸の王女の場面をはっきりと覚えていた。どちらかというときセクシャリティに関係する部分が頭に残ってしまうのだ。私の大学でこれほど演劇の事について、真剣に向き合った人たちに会った事がない。彼らに秘めた「演劇」の可能性はこれから芽生えていくのだろう。私も負けたくない。ここの経験を活かせるこそ、演劇の可能性は広がるのだ。

新・私の未来（3年後、10年後のビジョン）

【前置き、序章】

私は個人としても、演劇人としても中身がとても未熟である。それは心身共に幼いと言うか、自分というものがはっきりと提示、表現出来ない状態なのである。今、自分に迷いが出ている様な、私自身何を望んでいるのか、全くと言ってよい程わからないのだ。三年生になって、様々な経験を積んできたが、何を目指して、何をすればいいのか。高校演劇部で演劇が与える「感動」を大学でも研究しようと進学を決めた私は、大学で歴史や作品考察、舞台制作、脚本作りに携わったが、未だにみんな（合宿参加者）の様な方針が定まっていない。演劇を芸術と考える人、自分の表現方法のひとつとして捉える人、或いは国や地域といった場所の社会貢献（芸術祭やアートマネジメントなど）として活用する人、演劇を衰退させない様に復興を考える人もいる。私の演劇とは何だろうか。この合宿でそれぞれの目標や夢を聞かせていただいたが、やはり私にはこれだ！と共感出来るものがない（みんなの夢には協力的である）。ただ現時点で言えるものは、新たな演劇を生み出す演劇人とこの場で交流して、可能性が広がった事である。

『2019年～三年後～』

テレビ局のADか、新聞社、放送などのマスメディア業界に勤める。なるべくマスメディア関係の方が一般人の目に留まりやすいだろう。特にYahooやTwitter、Facebook、Instagramなどのインターネットは情報が集まりやすく、なくてはならない存在、いわば必ず誰かが目を通すものであるからだ。演劇関係だけではなく、日本の社会に関心を持ち、演劇が衰退しないように務めを果たすこと。その為にも、必要経費があるので今からでもお金を貯めることにする。また、LGBT関連のボランティアを主催出来るようにすること。（東京国際映画祭の様な）LGBTに協力的な会社（保険など）を増やすこと、渋谷や世田谷区だけではなく、東京から地方へLGBT政策を拡大させて暮らしやすい社会と概念を根付くこと。

→一方向的な考えだと思うので、コミュニティとネットワークの拡大に様々な人と関係を持つこと。人の関わりはネットだけではない。通信制としては優れているが、視野が狭くなると思うのでその対策も試みる。

『2026年 ～十年後～』

- ・ 人生のパートナーを見つけること。
- ・ 論文か小説、脚本で名声を残すこと、社会貢献と演劇に対して貢献する。
- ・ 再び、合宿メンバーに会うか。何かしらの制作を手がけたい。
- ・ LGBT 関連の演劇集団を結託して、定期的に公演を行う。(東京、地方、全国まで行ったら、海外のコミュニティ拡大のため、海外公演も行う)
- ・ 世界中すべての国へ訪れて自分がどんな世界に生まれて来たのか見届ける。

F/T キャンパスを受けて

わたしは そこで ことば を もっているひとに であいました。

わたしは とても、とても たのしく、ふわふわとすごしました。この上ない くのう と こうふく。
を よかん しました。いかり と かなしみも ひとくちだけ しりました。

わたし を とりまく、ことば を もつ なかまたち。あるひとは まりあにも ことば は あるといい。
あるひとは、あなたは ことばのわりに かしこい とゆった。なんて、ふしぎ！
へんなのう。わら

たぶん、わたしに 必要な、ことは ただ、まあく、平らに、ひじょうに やわらかくあることで そこには じょうげも さゆうも ない。
わたしは ただ まっさらに ほんとう だけを しゃべってしようと きいてしようと あじわって しようと おもっていて、

よのなか そんなに あまくは ない。と みんな つよくなるけれど、わたしは しなide いきてみる。
だって、そのまんまの ほうがわたしは たくさん あいされる。し、わたしは、もっと 他者 を あいせる。
だから、そうする。わたしは、たくさんの やさしいひとたちにまもられて、いる。

わたしは なにかを、けっして しょうひしないで されないで そして じょうげ に ならないように
どれいも きょうふ も どくさい も おうこく だって ならべてしまおう。けっして わけない
ことば を つかう。じかんを たっぶり つかってしまおう。わたしは わたしを ちゃんと あじわう。
だから、みんなも ちゃんと あじわう。わたしは ただ。よこに ひらべたく ねころんで、
やわらかく たのしく いっしょにいたい、

つづき、

あるひと の めを みていて、
わたしは て を にぎっている。
そんな しゅんかんの くのうかんの あまみや とろみや ぴりぴりとした ひりひりと した もはや、言葉 なんかに できない。
めに みえない。つよくて よわい。どこまでも やわらか。かたち の ない でも ちゃんと ある。そんな ものの そんなざい を わたしは しんじている。

わたしは よく みくだされたり ばかにされちゃったりするし なあんにも もってないから ほんとうに したに い したに！とゆう かんじ。
でも、でもね ほんとの ほんとう は しんじられないくらい わたしの からだは わたしの ひだりては ほんとうう に かしこくて。

だから、ぜったい わたしは つよくて よわい。かわいい ひとやまっさらな よわくて やわらかいひと。
いとおしすぎる ことば が 1ミリも ないひとにも
わたしは あつと ゆうまに こころに せまる ことば を おんなのこ と つくる。
いつか、おとこのこ とも つよく えらい ひととも。つくる。
みわくじゃなくて、みりよくで せまる。
わたし は つくるし、しんじているの。

ことば の ちから と みんなの ことを。

わたしの3年後／10年後のビジョン

さんねんご。
じふん の てざわり を じゅうにぶんに している。
おんなのこ たち と やわらかくて きれいな なにか を つくっている。

それは、なにか きんせんに ひっかかる。かんしん が むけられる。

あらしのまえの しずけさ。

ひと を ちゃんと あいする。

じゅうねんご。

たしゃ の てざわり を じゅうにぶんに する。

けいぞくして あいす。

たくさんの おんなのひと や おとこのひと おんなのこ や おとこのこ

えらくて つよい ひととも つくれるようになってる。それは まるくて やわらかい。

ひとりで じゃなくて ふたりで、もっと。

あたらしい なにか を、うみだして あいしている。

F/T キャンパスを受けて

私が今回のプログラムに参加した理由は、自分と同年代の学生たちが演劇についてどのように考え、感じ、演劇に向き合っているのかを知りたかったからです。その点に関して本当に今回貴重な体験になり、参加してよかったです。こんなにも濃い4日間は初めてでした。

F/T キャンパスを通して少しは私の中の硬い殻を壊す方法が見えた気がしました。私にとって芸術はコンプレックスであり、芸術家は憧れの対象でした。正直なことを言ってしまうと、『Woodcutters — 伐採 —』も『シカク』も『福島を上演する』も、よくわかりませんでした。しかし3日目の振り返りの時、よくわからなかったことと、観劇後不愉快な気持ちになったがそれが意図的に不愉快にさせられていたことに気づき悔しかった、ということを書いたら萩原先生に「よくわからなかったって言うんだけど、よくわかっているよ」と言っていただきました。そのことが私にとってはとても印象的な体験で、何か自分の中の糸口になるヒントをいただいたような気がしました。そして自分一人で見ていたら「よくわからなかった」の一言で済ましてしまっていたかもしれませんが、他のみんなが同じ演目を観劇して何を考え、どう感じたのか、そのことをリアルタイムでみんなの言葉で聞くことができたのがすごく新鮮な体験でした。やはり演劇人は面白いと思うと同時に、自分は芸術家でも批評家でもないのだなと実感しました。

そしてもう一つ大きかったのは柴ゼミです。普段感覚よりも頭で考えるタイプの人間なので、「好きでも嫌いでもなく、気になったものを見つける」という行為はこれもまた新鮮でした。柴ゼミ以降、自分の中の感覚を大事にするということができるようになりました。これは自分の感覚・感性と向き合うことができるようになったということだと思います。

私は人生において人との縁は必要な時に巡ってくるものだと考えています。今回の F/T キャンパスを通して出会った全ての人は今の、そしてこれからの私にとって必要な縁なのでしょう。それがわかるのは明日かもしれないし、10年後かもしれません。途方もない話かもしれませんが、私にとって人生で重要なのは“人”であり、“他者”なのだと思います。自分の価値観を変えてくれるような、自分が面白いと思える“人”。今回の F/T キャンパスを通して自分にとってはその意味でとても大切な縁に恵まれました。私たちはおそらく自分のフィールドを見つけてそこで活躍していける人達だと思います。10年後、20年後にそんな形でまた出会い、一緒に面白いことができたら素敵だなと思っています。

貴重な経験をありがとうございました。

わたしの3年後のビジョン

○劇団制作として

- ・ ホール公演を実現する。
- ・ 自分の好きな役者さんたちと一緒に作品作りをする。

○個人として

- ・ もっと面白い人間になりたい
- ・ 自由な生き方をしたい

わたしの10年後のビジョン

- ・ 誰かの背中を押せる人になりたい
- ・ 夢や熱い想いに応えられる力を持っていたい
- ・ 自分も夢や熱い想いをもち続けていたい

F/T キャンパスを受けて

F/T キャンパスの3泊4日の体験は、まさに非日常的体験で、その時間こそ最も演劇的だったのではないかと、今になって強く思います。なかなか観ることができない海外の演劇、ダンスの公演を観る。また通常では直接かかわることも少ない実際の演出家、振付家、海外のアーティストの方々とお話する機会。これらすべてが、その非日常を彩っていました。そしてなにより、ともに過ごす仲間たちが、このF/T キャンパスにいなればここまで密にかかわることはなかっただろう人たちであり、その出会いこそが最も非日常で、自分という人間と、自分の生きる世界に、深みと広がりを与えてくれました。

同時に今回強く感じたのは、日常と非日常とのつながりでした。自分は、普段 ARTCORE という照明会社でアルバイトをしています。大学のサークルでも照明のセクションをよくやることが多く、そのため照明機材について詳しく、自分にとって照明というもの、演劇の中の照明というものは身近で、日常でした。F/T キャンパスのスケジュールの中に、イデビアン・クルーの『シカク』を観劇する機会がありました。そのあと、『シカク』に関してイデビアン・クルーの主宰である井手茂太さんと、公演に関する話を聞く機会と、質問をさせていただく機会がありました。『シカク』の上演の中で、照明として、ナトリウム灯という機材が印象的に使われていました。これはどのようなものかという、トンネルの中で使われるような、すべての色を吸収し、セピア色に周りが見えるようになるものです。このことに関して、井手さんに質問をすることができました。井手さんもこのナトリウム灯に関して、非常にこだわりを持っているかたで、質問する場で、井手さんとこのナトリウム灯に関して熱く話をし、そしてこの上演における役割、効果についてお聞きすることができました。まさに自分にとって、普段の日常が、非日常につながる瞬間でした。

F/T キャンパスを受けて、自分をもっとも感じたことは、普段の日常での行動、考え、そのようなものの積み重ねが、次のステージへとつながっているということでした。日々毎日しっかり向き合い、生きること、そして同時に演劇というものに向き合うことが、これからの演劇をかんがえること、将来の自分へつながる第一歩だということでした。

改めましてF/T キャンパスに参加できてよかったです。ありがとうございました！

わたしの3年後のビジョン

演劇を続けている。

わたしの10年後のビジョン

演劇を続けている。舞台制作にかかわることを続けている。

3年後も10年後もきっと演劇にかかわること、舞台にかかわることを続けていると思います！

具体的なビジョンはまだまだわかりません。今も迷っています。でもきっと続けているのだと思います。

昔、演劇を続けていく人というのは、結局演劇でしか生きられない人だ、というのを聞いたことがあります。

自分もいつのまにかそんな人になってしまったと思います。

だから、ビジョンなんてものはないけど、とにかく続けていたいし、続けていると思います！

その決意をF/T キャンパスを受けて強くしました。

ありがとうございました！

現在からのノート

2016年11月30日水曜日、F/Tキャンパスからおよそ1か月が経った。レポートを書くということは応募の段階から聞いていて、今日がそのメ切だった。メ切の当日（前日ですらなく！）にこれを書いている。

残されていたのは、自分の名前が入った名札。観劇のパンフレットとチケット。裏紙のそこかしこに殴り書きされているノート。なぜか小金の入った封筒…。あの4日間が終わった後、一度すべて封筒の中に押し込んだ残骸たちを、今頃になって開封する。

パンフレットをめくると、参加者とスタッフの名簿が出てくる。ノートにはもはや読むことができなくなってしまった文字たちが散乱している。殴り書きの裏紙もパンフレットもポケットに携帯するために縦半分に折られていて、端はたいていが折れ曲がっている。

あの4日間には一体何が起きていたのか。断片はタイムテーブルを見れば追える。『Woodcutters — 伐採—』を観た。『シカク』を観た。『福島を上演する』を観た。ルパと話した。井手さんと話した。マレビトの会と話した。ファイルズと話した。イセと話した。柴さんのゼミを受けた。六本木アートナイトにも行った。

あの4日間には何が起きていたのか。あの4日間から私は距離が取れているのか。私はまだあの4日間の中にいる。何度でも帰ってしまう。

F/Tキャンパスとは一つの「場」であった。間違いなくそう言い切れる。立ち上げた人間がいて、支えた人間がいて、特異点になる人間がいて、熱狂する人間がいた。だからこうも言える。F/Tキャンパスは一つの長い「演劇」であった、と。それは集団宿泊によってそれぞれの場所が地続きになり、同じ場所で同じ世代の学生たちが普段の生活とは別の時間を生きていた。そこには共同幻想が立ち上がり、場はとんでもない熱量を持った。その熱は殴り書きの文字たちが証明している。

私にとっては、必ずしも美しいだけの場ではなかった。泥臭い対人しかできなくて、ものすごい恥を掻いた。場からの疎外を感じた時間もあった。それも含めてのF/Tキャンパスだと、そうでなくてはと思う。タイミングが変かかもしれないが、F/Tキャンパスで関わった人たちはみんなすごく好きだ。感謝もしている。これからもきっとどこかで会うのだろうと思っている。

幻想は熱を失って思い出になっていく。しかし、未だそこに「現在」を感じているというのもまた確かだ。幻想が思い出だけに収斂しない所が、今回の私の中でのF/Tキャンパスの成功を物語っている。

本当にたくさんものを貰ってしまった。それらをどう返していったらいいのかもまだわからない。現在学部2年。先行きの見えない中で、F/Tキャンパスがとてつもない「場」として今現在も私の中に生き続けていることを書いて、このレポートを終える。

わたしの3年後／10年後のビジョン

正直に書きます。今、これを書いている今の時点では3年・10年後のビジョンは書けません。横井さんにとってすごく大切な作業であることは知っていますが、ごめんなさい。

理由には、ここ最近、先の「ビジョン」を持つとうとして自分の身体に合わないと感じたことがあります。周りの人たちにモデルを見つけようとしていたり、そしてその人の葛藤とかを安易に自分事にひきつけてしまったりと、結局今生きている現在や今対面しているその人への感覚が死んでしまうことに気づきました。あくまで、今の僕の状態の問題です。

本当にいろんなことが模索状態なので、少し時間があいてビジョンが肌に合うころになったら報告します。

代わりに今進行形で起きていることを少しだけお伝えします。

キャンパスが終わってから、お芝居をよく観ています。その中で大学にもWSに来てくださった方のWS & Auditionに参加の応募をしました。来週の月曜から二回に渡って行われます。今の関心はその人の考える舞台の身体に向いているので応募しました。とても厳しい道のりになることを覚悟しています。一方で、大学では理論化（批評）、概念化の勉強もしています。これも、課題は山積みで、目下訓練中です。

強いてビジョンを考えるとしたら、その二つの実践が相互に絡み合っているような生活を3年後には送りたいと言えます。何にせよ、来週のAudition次第でまた自分のモードは変わると思います。

改めて、F/Tで貰ったものは今の僕にも現在形で生き続けています。あの4日間の場を起こしたすべての人たち、そして誰よりも横井さんに心からの感謝を伝えたいです。これから生きていく中で、そのことは返していかなくてはいけないと強く思っています。（横井さん今度こそお酒飲みましょう。）不安定な若者の行く末をこれからも見守ってくだされば幸いです。

F/T キャンパスを受けて

浜松という東京から離れた地で暮らす私がこのキャンパスについて知ったのは、まったくの偶然でした。たまたま博物館学芸員課程の実習先を同じくした大学の後輩が昨年度参加していて、私に話してくれたのです。これまでに小学校の学芸会を除いて舞台に立つという経験をしたことがなく、演劇というものについて強い関心を寄せたのも大学入学後、加えて観劇はもっぱら歌劇が中心、専門は日本の現代美術である私にとって、参加は少し不安でした。けれど、このフェスティバル/トーキョーという一つのイベントのなかの、F/T キャンパスという一つのプログラムのために集まる人々はどんな考えをもっているんだろう、大学で座学は受けたけど、実際に舞台に立つ、また舞台をつくるということはどんなものなのだろう、という未知への好奇心や新しい友人、ネットワークをつくることへの期待のほうはずっと大きかったです。

結果は期待以上の大収穫でした。東京からの参加者が多かったこともあり、前半は都市部に住む方とのさまざまなギャップが苦しかったなあというのが正直なところですが、ゼミと観劇、それに付随するスペシャルトーク、どれをとってもこんなに濃密だったことはありません。

特筆すべきこのプログラムの素晴らしいところは、なんといっても「対話」にあると思います。観劇後に夜遅くまで多くの友人と感想と批評を共有する、演劇について同じアプローチから向かう、作り手がすぐそこにいる…地方から単身遠征しつづける私にとって、これ以上はないほどの喜びです。特に柴ゼミにおいては、「演劇をつくる」というまったくの未経験であるイベントを、先生のフォローや仲間のアイディアによって、非常に有意義な一つの能動的経験として自分のなかに収めることができたように思います。初めてひとつの作品、とまでは呼べないかもしれない「なにか」をつくってみたとき、「すごい、演劇をするってこんなに面白いのか、みんなこんなに楽しいことやってたんだ、そりゃあ演劇を続けるはずだなあ」という感激は、きっとこの先も忘れないと思います。「他者」と、自分ではない、けれど自分と地続きの「他者」に為ってなにかをつくる、これが演劇にしかない、演劇でしかできないこと。ゼミで学んだたくさんのうちの、わかっていたようで、やっと自分できちんと理解したことです。

たくさん話したかった、話してみたかった人たちに囲まれて、自分はこれからどうやって演劇に関わっていこうか、どう関わっていけるのか、どう関わっていききたいか、今自分の中にはたくさんの事象と思考がなймаげになっいて、また未知の世界が広がっている、そのことに本当に喜びを感じます。

わたしの3年後／10年後のビジョン

将来は地元で大きい現代芸術祭を開こうと思っていたのですが、皆様もよくご存じの北川フラムというひとが、来年あたりに奥能登でやっちゃおうですので、人生計画を練り直しています。

まずは3年後ですが、進学する大学院で次の2年間に何を学び、何ができるようになっていくのかは現状まったくわからないのですが、少なくとも今より場数を踏んでいることと思いますので、もう少し、形として残せているものが増えているといいなと思います。また、みんなとも「2020」後の日本についてはたくさん話しましたが、10年後、2026年については、日本の文化芸術がどのような事態になっているのかこれも現状予想がつきませんが、普段の生活のなかに芸術が当たり前存在している社会のために、何かしらのことができていれればと思います。

3年後、10年後というのはわかりやすく、区切りのついた時間ですが、一生かけて、いつも、いつでも、考えている人でありたいと思います。自分の軸になるものはおそらく、対話と思考（とお酒）なのだということについて、今回のキャンパスでさらに確信が強くなりました。モノ、コトに対して、まずは常識（であると思われること）を疑い、それをきちんと言葉にすること。そしてそれが独りよがりにならないよう、他者との対話のなかで思考を調整していくこと。そのためにはアンテナを張り続けることを絶やさず、ネットワークの構築とコミュニケーションを惜しまず、自分自身に常に問いかけを行う。そうして自分のなかをブラッシュアップし続けて、「芸術」というものについて、考え続けることができればと考えています。

F/T キャンパスに参加して

F/T キャンパスへの参加を一言で表すと、私の場合「未知との遭遇」になる。

- ・海外の演出家の方のもと海外の役者さんが演じる演劇作品を初めて見た
 - ・(以前も観劇作品について議論する機会はあったが)1つの作品についてあれだけ時間をかけて、かつ内容の濃い議論をした
 - ・有名演出家の方から直接作品についてのお話を聞くことができた
 - ・柴幸男さんの元で学んだ劇づくりの1つの方法
 - ・演劇に興味がある他大学生との合宿という形での長時間の交流(朝にも談話室から演劇・芸術トークが聞こえてきたのは印象強い)
- ……まだあるけれど、挙げるときりがない。どれも刺激的で、自分の未熟さを感じる良いきっかけとなった。発想、知識、意見をうまく言語化すること
 ……まだまだ足りないものが多すぎることを良い意味で思い知らされる。

参加前の「3年後と10年後のビジョン」は、もう読み返すことはないと思う。大きな変化が生まれたとかではないし、相変わらず舞台上に立っていたという気持ち以外に何かあるわけでもない。後悔か何かあるとすれば、(比較するものではないけれど)皆さんしっかりビジョンがあってとても素敵なのに、私は具体的じゃない上に何故か病んでいるみたいなのだった…文章の稚拙さだってなんとも言えない…ということなのですが。

いや、問題はそこではない。自分恥ずかしいとかではなく、本当は参加して私にもそれなりに変化があったということを伝えたい。大本は変わらないけれど、最終的にはこういう舞台にこういう心持で立ちたいとか、そういう微妙な変化。それから、演劇以外でももっと幅広い知識を吸収したくなった。色々な場所から色々な専攻と経験をもった人が集まって、質の高い体験をするこのイベントだからこそこんな風に変化したのではないかと思う。ここでの体験、他の参加者の方の姿は価値観の物差しを作るものとして十分すぎるくらい威力があった。ビジョンなんて簡単に更新も変更もされることを改めて知ることができた。だからもう、読み返す必要はないと思っている。

※前の文が字ごちりちりで自分でも引いたため簡潔にしようと努力しましたが、限界でした……運営の方々、講師の先生方、また他の参加者の皆様、本当にありがとうございました。

わたしの10年後のビジョン

私の目標は、10年後、自分のことを「役者」だと胸を張って言えるようになることである。それは趣味だけの領域ではなく、自分の人生をかけて、あわよくば生計を立てる手段としても演劇にかかわり続けることを目指したい、という意味である。恥ずかしながら、具体的にどんなところにいたいとか、そうした明確なビジョンはない。

私が演劇を好きなのは、その中に死が存在しているからだと思う。映像作品にも言えることだが、2時間の作品であれば2時間だけその世界と人物は生きて死ぬ。しかし、見た目的には一瞬の生しかないのにその姿は観た人の中にずっと生き続けることがある。時には人生さえも変えてしまう。10年後も20年後も、私が目指す演劇は、そしてなりたい役者はそれができる役者だ。命は一つしかないから、どうしても慎重に生きてしまう。満足して死にたくても中々死ねない。しかし作品の中であれば、他人と関わりあいながら全力で生きて、消えない声を届けながら何度も違う人生を終えることができる。だから趣味として、片手間でやることは避けたい。舞台の上の世界から誰かに爪痕を残すほどの生を生きるのならば、自分のすべてをかけなければならぬ私は思っている。

ただし、私にはそうなるための実力が圧倒的に足りていない。大学へ入学したのは作品について考える上で必要となる多ジャンルの知識を得たい、人を理解する上で必要な普通の日常の経験を、さらに芸術文化というものに関する基本的知識の習得、保険などいくつもの動機があったのだが、最も大切だったのは「親元を離れ多くの作品や人に出会える場所に行き、将来も演劇を続けられるだけの実力とパイプを作る」ということであった。大学を卒業するまでの4年間、またその後も、日常のあらゆる事象は将来につなげることができると常に考え精進することが理想である。しかし近いところの目標は、全く日常ではないが、ダンスの苦手克服である。そのためにお金を貯めて、専門のスクールで教わりたいと考えているのだがなかなか難しい。悩みどころ。

勿論自分の理想がとてつもなく高いこと、冒頭の「それだけ」がとてつもなく難しいことであるのは自覚している。中学から今まで部活を中心に活動をしてきて、自分に演技の圧倒的才能がないことも確認済みである。それでも舞台に関わるのは好きだし、その上に立つのは至上の喜びだ。演劇をすることは、生き方に固執するただの私の我儘だ。私は10年後も、いや、自分が死ぬまでこの我儘にしたがって生きていたい。だからできる限り、やれることはやってみたいと思う。具体的でもなければ、きっと社会的価値もない。ただ、私という1人の人間と、もし作品を観て何かを感じてくれた人がいれば、その人たちにとって、とても大きく価値のあるものにはなる。今のままでは無理だとしても、足掻けるだけ足掻いて、10年後には「私は役者だ」と胸を張って言えるようになりたい。

フェスティバル / トーキョー実行委員会事務局

〒170-0004 東京都豊島区北大塚1-15-10 東部区民事務所3階
TEL:03-5961-5202 FAX:03-5961-5207

発行 フェスティバル / トーキョー実行委員会
編集 フェスティバル / トーキョー実行委員会事務局
発行日 2017年4月7日
禁・無断転載 © フェスティバル / トーキョー実行委員会